

「テレンテイの小父さんは、何處でゐるの？」

「野菜畑にゐら、」とシランテイは答へた。

乞食娘は百姓家の後から野菜畑へかけつけて、そこにテレンテイを見出した。細りした顔に痘痕のある、足の長い、丈の高い爺さんのテレンテイは、女の襦袢を着て、裸足で野菜畑に立つて、酔ひどれた眼をあげながら、暗い雨雲を眺めてゐた。彼は鶴のやうな長い足を見せて、吊床のやうに揺れてゐた。

「テレンテイ小父さん、」と白茶髪の乞食娘は爺さんに聲をかけた。「小父さんよう。」

テレンテイはフョークンを見下した。彼の威かつい、酔ひどれた顔は、小さい、間の抜けた、頓狂な小娘——しかし、可愛らしくも思つてゐる小娘——を見た時に誰も顔に浮ぶ邪氣のない微笑みをひろげた。

「お、フョークラかい、神様の召使！」と優しく唇をなめずりながら言つた。「何處へ行つて来た？」

「テレンテイ小父さん、」とフョークラは靴屋の外套の袖を引つぱりながら、咽び聲で言つた。

「兄さんのダニルカが大へんだよう！ 直ぐに來てよう！」

「何が大へんなんだ？ お、何て雷だ！ 桑ばら、桑ばら……何うしたつて？」

「伯爵さまの樹叢でね、ダニルカは樹の幹の穴へ手を突つこんだの、そしたら抜けなくなつちやつたんだよ。小父さん、行つてよう。兄さんの手を引抜いておくれよう。」

「何だつて手を突つこんだんだ？ 何だつて？」

「私にね、呼子鳥の卵をとつてくれるつて手を入れたんだよ。」

「やつと物心がついたばかりなのに、やれやれ、お前にやもう苦勞がはじまつたのかい……」とテレンテイは頭を振つて、のろ臭さと唾をした。「さあ、どうしてやれば良いかな？ 行つてやらなきやなるまいて……狼に喰はれるかも知れないのに、馬鹿な子供たちだ！ さあ行かう、孤兒！」

テレンテイは野菜畑を出ると、長い足を大跨にあげて、村道をぐんぐん歩き出した。彼は立停るやうなこともなく、まるで背後から押されてゐるか、何かを追ひかけられてゐるかのやうな格好で、傍目もふらずに急いでいつた。フョークラは彼に蹤いてゆくのがやつとであつた。

彼等は村を出はづれると、遠く暗緑色に横はつてゐる伯爵の樹叢をさして、埃つばい道へと曲つた。そこは二露里ばかり離れてゐた。雲は早くも太陽を遮つて、見る見る中に、空の青色が一

隈も淺さず蔽はれてしまつた。あたりは薄暗くなつた。

「桑ばら……桑ばら……」とフョークラはテレンテイの後に息喘きながら囁いた。重い大粒の雨の最初の雫は、埃つばい道に黒い點々をちらした。大粒の雫がフョークラの頬にも落ちて、涙のやうに顔の下へ流れた。

「降り出したな」と靴屋は裸足の骨ばつた足で埃を蹴あげながら呟いた。

「フョークラ、雨つて良いもんだぞ。草や木は、俺たちが麵麩を喰ふやうに、雨で育つんだ。雷さまを怖がつちやいけねえよ、孤兒、お前のやうな小ぢやなものを殺すことはねえからな。」

雨がはじまると同時に、風はぱつたりと静まつた。雨のざんざん降る音が、焼けた道路と若々しいライ麦の上に響くだけであつた。

「フョークラ、かう浴びせられちや」とテレンテイは呟いた。「體中びしょ濡れになつちまはあ。どうだ娘つ子！ 頸からどんどん流れこんでゐらー！ だが、怖がるなよ、お馬鹿さん……草はすぐに又乾くし、地面もすぐに乾くし、俺たちも、すぐに乾くからな。太陽さまは、みんなに同じにして下さるだ。」

長さ六アルシンぐらゐの閃光が二人の頭の上で輝いた。と、雷の大きな轟きが鳴り渡つた。フ

ョークラには、何か巨大な重いものが空を轉がつて、頭の天邊で碎けたかのやうに思はれた。

「桑ばら……桑ばら……」とテレンテイは胸の上に十字を切りながら言つた。「小さい孤兒、怖がるぢやねえよ。ごろごろ鳴るのは呪つてゐるんぢやねえ。」

テレンテイとフョークラの足は濡れた粘土に掩はれてしまつた。滑つて歩き辛かつたが、テレンテイは一さう大跨にぐんぐん急いだ。弱い、小さい乞食娘は、ぜいぜい息を切らしながら、いまにも倒れさうであつた。

が、たうとう二人は伯爵の樹叢に着いた。一陣の風に煽られた濡れた樹立は、二人の上に瀧のやうな雫をそゞいだ。テレンテイは切残りの株をわけながらダニルカの居場所を探しはじめた。

「どつちの方だ、ダニルカの入つたのは」と彼は訊いた。「さあ、案内しろ！」

フョークラは茂つた樹叢へと彼を連れていつた。そして一露里ほどゆくと、ダニルカの居場所を教へた。

彼女の兄は、妹と同じ赤い頭髪をした、病身らしい、顔色の青い、今年八つの少年であつた。

彼は樹にもたれて立つてゐた。そして頭を一方へ傾げて、流し目に大空を眺めてゐた。彼は片手に見すばらしい帽子を持つてゐたが、もう一方の手は古い科木の幹に隠されてゐた。子供は風の

空をちつと見あげながら、自分の災難は一向氣にかけてゐないらしかった。ふと、足音を聞きつけて、靴屋を見ると、彼は弱々しい笑顔になつて言つた。

「怖ねえ雷さままだねえ、テレンテイ小父さん。俺あ今までに、こんな雷さま聞いたことがないや。」

「そりやいゝが、お前の手は何處に突つこんでるんだ？」

「この空洞……テレンテイ小父さん、引つぱり出しておくれよ。」

その樹は穴の端のところが裂けてゐて、ダニルカの手を鉄みつけてゐた。中の方へ押しこむことは出来るのであつたが、引き戻すことは出来なかつた。テレンテイは裂け目のところをぐいと剝ぎとつた。赤くひしやげたやうになつてゐた子供の手は、うまく引き出せた。

「ごろごろ鳴つて怖いねえ、」と子供は手を擦りながら再び言つた。「どうして、あんな音がするの？ テレンテイ小父さん。」

「一つの雲が他の雲と打つかり合ふからだ、」と靴屋は答へた。

三人は樹叢を出て、薄暗い道路へと、樹叢づたひに歩いた。雷鳴は次第に穏かになつて、その轟音は、村の遙か向うに聞えてゐた。

「こゝにや、こないだ野鴨が飛んでたよ、テレンテイ小父さん、」とダニルカは尙も手を擦り擦り

言つた。「あいつら、グニリヤ・ザイミシチヤの沼に巢を喰つてるんだよ、きつと……フョークラ、

お前に夜、鶯の巢を見せてやらうか？」

「夜鶯の巢に觸つちやいけねえよ。そつとして置きなよ、」とテレンテイは帽子の雫を振りはらひながら言つた。「夜鶯は神様を讃へたり、人の心を歌はしたりするために、咽喉に佳い聲を授かつてるんだ。奴らをおどかすのは罪だぞ。」

「ぢやあ雀は？」

「雀なら構ふことあねえ、あいつは録でなしの悪い鳥だ。拘摸のやうな眞似をしやがる。人間のやうに幸福にならうなんて思はねえ奴らだ。キリスト様は十字架にお登りになつた時、猶太人に釘を持つて来て、『生かしたまゝで、生かしたまゝで』と言つたのは雀なんだ。」

大空に明るい青色があつちこつちに現はれた。

「見ろ、」とテレンテイは言つた。「雨で蟻の塔が打つ碎されてら。悪黨奴ら水浸しだ。」

彼等は蟻の塔を覗きこんだ。雨水が流れこんで巢を碎されたので、蟻どもは大混乱を來たし、溺れた仲間を救ひださうと、泥の中をあつちこつちへ忙がしく馳せまはつてゐた。

「お前にやこんな心配は要らねえ、お前は死ぬやうなことアねえからな、」とテレンテイは齒をむ

き出して笑つた。「太陽さまが温めて下さりや、お前はすぐに元氣になれるだ……お前にや良い誠めだ。これからは低い場所に住まねえやうにしろよ。」

彼等は歩き出した。

「それから、あすこにや蜂がゐるよ、」とダニルカは櫛の若木の梢を指しながら言つた。

その梢に、濡れて怯けた蜂の群がゐた。樹皮も葉も見えないほど澤山ゐた。多くのものは、重なり合つてゐた。

「ありや蜂の巢換へだ、」とテレンテイは説明した。「奴らは、巢を換へようとして飛んでゐたんだ。ところへ、雨に降られたもんだから、あすこへ集まつたんだ。巢換への蜂の飛んでるのを留らせようと思つたら、水をぶつかけてさへやりあ雑作はねえ。それから巢換への蜂をとるにや、袋の中へ枝を曲げて入れて、それを振るへば、みんな袋の中へ落ちちら。」

小さいフォークラは不意に顔をしかめて、烈しく頸首を撫でた。ダニルカがその頸を見ると、大きく眼れ上つた跡が見えた。

「へつ、へえい！」と靴屋は笑つた。「どこでやられたんだ、フォークラ、おしやまさん！ この森にや、そこの木の上に班蟻つて奴がゐる。雨に降り落されて、そいつが一つお前の頸へたか

つたんだ——それで眼れたんだ。」

太陽は雲の蔭から現はれ、森や、野原や、三人の友達の上に暖かな光を一めんひろげた。音かすやうな薄暗い雲は遙か向うに遠ざかり、それと一緒に雷鳴もおさまつた。空気が温かに匂やかになつた。そこらにはカツプ櫻や、繡線菊や、鈴蘭のかをりが漂つた。

「鼻をつけて見ろ、いゝ匂だぞ、」とテレンテイは羊毛のやうに見える花を指しながら言つた。

彼等は汽笛の音と轟つといふ響を聞いた。それは嵐雲の運んでゐた其れとはちがつた轟音であつた。貨物列車が、テレンテイとダニルカとフォークラの前を通り過ぎたのであつた。汽罐車は息喘く音をたて、黒煙を噴きあげながら、後に二十車輛も曳いてゐた。その力は凄じいものであつた。子供たちには、機械が生物でもないのに、馬の助けもなしに、それほどの重量を曳いてゆくのが面白かつた。そしてテレンテイはその譯を二人に説明して聞かした。

「そりや蒸汽といふものだ、子供たち。蒸汽が働くんだ……ほれ、車輪の傍の機械の下に推出してゐるだらう、あれが働くんだ……」

彼等は鐵道線路を横切り、河土堤を下りて、河の方へと歩いた。それは格別目的があつたわけではなく、全く行き當りばつたりであつたが、途中、話の題目は盡きなかつた……ダニルカはさ

まさまのことを訊き、テレンティイは話し聞かした。

テレンティイは一々彼の質問に答へた。自然には彼を欺くやうな秘密は何にもなかつた。彼は何でも知つてゐた、例へば、彼が野の花や、動物や、石などの名を残らず知つてゐるやうに。彼はどんな草が病氣に效能があるかを知つてゐたし、馬や牛の齡を言ひ當てるのも容易であつた。太陽や月を眺め、小鳥の容子を見て、翌日の天気模様を語ることも出来た。事實、こんな風な博識はテレンティイ一人だけではなかつた。シランティイ・シリツチも、旅舎の停主も、市場農園の園丁も、牧夫も、その他多くの村人も、概して言へば、テレンティイと同じやうに自然を知つてゐた。これらの人々は書物から學んだのではなく、野や、森や、河土堤から學んだのであつた。彼等を教へたものは、彼等に啼く音を聞かせた鳥自身であり、眞紅の光を残して沈みゆく太陽そのものであり、木々そのもの、野草そのものであつた。

ダニルカはテレンティイをぢつと見詰めたが、爺さんの一言一言を貪るやうに呑みこんでゐた。春、温かさや野原の緑の單調さに退屈する前、あらゆる物が新鮮で香氣に充ちてゐる時、黄金色した甲蟲の話や、鶴の話や、水嵩増す河の話や、耳のあたりまで伸び上る麥などの話を、誰か聞きたがらないものがあらうか？

靴屋のテレンティイと孤兒のダニルカとは、野原を歩きながら、のべつに話してゐて、少しも退屈しなかつた。彼等は涯なき世界に彷徨することが出来るのであつた。彼等は地上の美を語るのに氣をとられて、弱い、小さな乞食娘が後にせかせかと急いでゐるのを忘れてゐた。彼女は息切れがして、のろのろした歩調で動いてゐた。眼には涙を浮べてゐた。疲れることのないこの二人の彷徨者を引き留めることが出来たら、彼女はどんなに嬉しいであらう。が、誰のところへ、又何處へ行くことも出来ないのだ。家もなければ、身寄りのものもないのだ。彼女は否應なしに、二人の後に蹤いて、その話をきいてゐなければならぬのであつた。

正午頃、三人は河土堤に腰を下した。ダニルカは靴から、漬物に雑せて押しつぶした麵麩片を取りだして、彼等は食へはじめた。テレンティイは麵麩を食べる時、お祈禱をあげた。それから土堤の砂地に寝ころんで、ぐつすり眠つてしまつた。彼の寝てゐる間、ダニルカは水の面をぢつと眺めながら想ひ沈んでゐた。彼はまさまの事を考へて見なければならなかつた。彼は今しがた嵐を見た。蜂や、蟻や、汽車を見た。今彼の眼の前には、魚が泳ぎまはつてゐた。或るものは二吋より少し大きく、或るものは釘ほどでもなかつた。一匹の毒蛇は、頭を高くあげて、一方の土堤から、もう一方の土堤へと向つて泳いでゐた。

夕方になつてから、わが彷彿者は、やうやく村に歸り着いた。子供たちは、共同組合の麥の倉庫になつてゐる物寂びしい小舎へ泊りに行つた。テレンティは二人に別れると、居酒屋へいつた。子供たちは藁の上に身を寄せ合つて、うとうと眠りに落ちた。

ダニルカは熟睡しなかつた。彼は暗黒の中をちつと見詰めてゐた。彼にはその日見たものが、何もかも眼の前に現はれてゐるやうな気がした。夕立雲、輝く日光、小鳥、魚、足長のテレンティ。その印象の數々は、疲れと飢えと一緒になつて、彼にはあまりに多過ぎるやうに思はれた。彼は火の傍にでもゐるやうに暑苦しく、右左へ何度も寝返りうつた。彼は今、暗黒の中に、あれこれの事が、どんなに彼に憑きまどつてゐて、どんなに彼の心中を攪き亂してゐるかを誰かに話しかつた。が、誰も話す相手はなかつた。フョークラは小さ過ぎて何にもわからなかつた。

「明日テレンティ小父さんに話さう」と子供は思つた。

子供たちは家のない靴屋のことを思ひながら、寝入つてしまつた。夜が更けてから、テレンティは二人の容子を見に来て、彼等の上に十字を切つた。そしてその頭の傍に麴麩を置いた。誰も彼の愛を見たものはなかつた。それを見たのは、大空に懸つて、物寂びしい小舎の壁穴から、覗しげに覗き込んでゐる月だけであつた。

危険

——或る取者の話——

その事件は、溝河コウガの後方ウシラの、すつと遠くにある森で起つたのでした。私の死んだ父親は、地主に五百ヒャク留ル拂つてゐました。その頃、私たちの家族ヤシエレフスキイの百姓たちは、地主から土地を借りてゐるのが普通でしたから、半年毎に地代を拂つてゐたのです。父は信心深い男で、よく聖書を読んでゐました。そして人を購すとか、不正な事をするとか、人に損害を與へるとかいふ方の事は、よく謹んでゐました。ですから百姓たちは、非常に父を尊敬してゐて、誰かゞ税金や、その種類のことや、又は、金を持つて町へ行かなければならぬやうな場合には、いつも彼を町へ出向かせました。彼は人並すぐれた人間でしたが、悪く言ふ譯ではありませんが、その缺點を言へば、氣質の弱いといふことでした。彼は酒が好きで、居酒屋の前を素通りすることが出来ませんでした。はいつて一杯のむと、もう止められないで、酔ひどれるまで飲んでしまふの

です。父は自分でもこの弱氣は知つてゐましたから、皆の金を持つてゆく時には、もし眠りこけるやうなことがあつてはならない、ひよつと金を失くすやうなことがあつてはならないといふので、いつも私か妹を連れてゆきました。

實を申しますと、私の家族はみんな火酒が好きでした。私は讀むことも書くことも出来ませんでしたので、町の煙草店に六年間奉公してゐたものです。そして紳士の方と話をする機會がありましたので、上品な言葉を使ふことが出来ました。が、火酒といふ奴は、或る本で讀んだ通り、實際「悪魔の血」です。火酒のお蔭で私の顔は薄暗い色になりましたし、私の身邊のこともうまく行きません。御覽の通り、愚かな無教育な百姓同様、馭者になつてゐるのは、そのためです。

そこで今お話しましたやうに、父は地主に金を拂ひにゆきました。妹のアニエトカを連れてゆきましたが、その頃、アニエトカは七つか八つで——その背丈に似ず、馬鹿な仔猫でした——彼は途中酒を飲んで、遠いカランチヨまでは無事にゆきましたが、カランチヨへ着くと、モイセイカの居酒屋へ行きました。父の例の弱氣に負けたのです。彼は三四はい飲むと、人々の前に句歌をまきはじめました。

「俺は身分の低い卑しい人間だが、」と彼は言ひました。でも、衣兜にや五百ルーブリ持つてるん

だ。俺がその氣になりや、この居酒屋だつて、皿小鉢だつて、モイセイカだつて、こゝにゐる猶太人や猶太の子供たちだつて、みんな残らず買つてしまへるんだから、豪氣なもんだらう、」と彼は言つたものです。かういふ癖は父の笑談なので、その中に、今度は愚痴つぽくなつてゆきました。「金持ちになるつてことは、商人や何かになるつてことは、苦勞の多いこつたよ、教徒の皆の衆！金がなけりや心配もねえ。金を持つてりや、悪い奴に取られやしねえかと、のべつ衣兜に氣を配らなきやならねえ。たつぷり金を持つてるものにや、世の中は恐ろしいやね。」

酔ひどれ達は、その句歌を本氣で聽いてゐました。その頃カランチヨでは鐵道線路の工事最中で、浮浪者や無宿者が蝗か何かのやうに集まつてゐました。父はさんさん句歌をまいてから引きあげましたが、もう間に合ひませんでした。饒舌といふ奴は雀ちやなし、一たん飛んだら、もう捕まへようがありません。二人は森づたひに行つたのですが、間もなく、後から馬を飛ばしてくるものがありました。父は臆病者ではありませんでした——受け合ふわけにも行きませぬけれど——急に不安に襲はれました。森には道らしい道はなく、たゞ乾草や材木を運ぶ切明けがあるだけでした。ですから、馬を飛ばして来るやうな、殊に眞晝間馬を飛ばして来る用はないはずです。何か目的があつて驅けつけたのにちがひありません。

「誰かを追つかけてゐるやうだな、」と父はアニユートカに言ひました。「恐ろしい飛ばし方だ。俺や居酒屋で饒舌するんぢやなかつた。この舌に呪あれだ！　なあ、小さい娘。どうも胸騒ぎがしてならねえ。良くねえことがなけりあいゝが！」

父は自分に危険のせまつてゐることを早くも悟つて、アニユートカに言ひました。

「こりや暢氣に構へちやゐられねえ。奴ら追つて来るだ。だからなあ、アニユートカ、お前に金を渡すから下裳の中へ隠してくれ、そして樹籬の中に隠れる。もし奴らが俺を捕まへると見たら、お前は大意で母親のところへ歸つてな、母親にわけを話して、金を村長に返させてくれ。たゞ、よつぽど氣をつけて、誰にも見つからねえようにしろよ。森の奥の溝河づたひにゆくんだぞ。さうすりや見つかかりやしめえ。とつとと驅けてゆけよ、神様のお蔭がありますやうに！」

父はアニユートカに札の包みを渡しました。彼女は樹籬の茂みをかきわけて、身を隠しました。その中に、馬にのつた三人の者が父の傍へ乗りつけました。一人は眞紅の襦衣と長靴をつけた、猛々しい、顔の大きな男。あとの二人は襦袢服をまとつた醜い姿の者で、いづれもこの沿線の工夫でした。

かうして父の恐れを通りのことが起りました。眞紅の襦衣を着た、並はづれに兇猛らしい屈強

の男は、馬を下りると、ほかの二人と一緒に父の行途をふさぎました。

「おい、停れ。金を出せ！」

「何の金だ、飛んでもねえ！」

「お前が地代に持つてゆく金よ。その金をこつちへ寄越しちまへ、禿老爺、渡さなきや引つばたいて、命をもらふからさう思へ！」

かう言つて三人は父を剝ぎにかゝりました。すると父は、悲みもせず憫みも乞はずに、憤然と感きり立つて彼等を怒鳴りつけました。

「何だつて俺を責めやがるんだ、」と父は言つたのです。「不頼漢め。罰當り、地獄へでも行きやがれ！　金の代りに三年かゝつてやつと癒るほど背中へ穴をあけてくれるぞ。とつとと失せろ、誰け野郎。失せねえと、俺の方からやつつけるぞ。俺や六つ弾の拳銃をこの懐中にちやあんと持つてるんだ！」

ですが、その言葉も追剝どもを抑へることは出来ませんでした。彼等は棍棒で父に打つてかかり、父の手を縛りあげてしまひました。

彼等は馬車の中を隅から隅まで探し、父の服の中を探し、長靴も引きぬきました。父を打つて、

却つて激昂させたのを知ると、彼等はいろいろなやり方で、父を責めました。その間、アニエートカは樹籐の中に坐つて、事の有様を見てゐました。父が地面に倒されて、息喘いでゐるのを見ると、急いで歩き出して、溝河づたひに家路に向ひました。彼女はまだほんの子娘でしたから、何が何やら譯がわかりません。それに方角も知らないで、たゞ足の向く方へと走りました。その邊から家返は十二露里ほどの距離でした。ともかく一時間ほど走りましたが、大人なら一歩で進むところを、彼女は二歩運ばなければなりません。それに裸足ですから、尖刺だらけの樹籐の中を、さうすすん行けるものではありません。大人でも馴れてゐなければ、うまく歩けませぬのに、小さい妹はいつも煖爐の上にうづくまつてゐるか、中庭に遊んでゐるのが常でしたから、森の中を走るの恐ろしいことでした。

それでも日の暮れ方、アニエートカは人家のあるところへ着きました。見ると、それは小舎でした。クラウン森にある山林局の小舎だつたのです。その頃は、或る商人が借りてゐて、炭を焼いてゐました。妹は戸を叩きました。一人の女が出て来ました。それは炭焼の女房でした。アニエートカは何より先に、わあつと泣き出しながら、今しがた見て来た有様を残らず話しました。金のことも言つてしまひました。炭焼の女房は、彼女を不憫がつて言ひました。

「まあ、可哀相に、こんな小ぢやかな娘が！ さあ、おはいり、何か食べさせてあげるから。」

女房はアニエートカを宥めて、食べものや飲みものを與へ、彼女といつしよに涙をこぼしさへしました。アニエートカはその振る舞ひに感じ入つて、ちよつと考へてから金の包みを女房に渡しました。

「藏つておいて、明日の朝あなたにわたすから、家へ持つておいでよ。」

女房は金をしまひました。そしてその時笹草の乾かしてあつた煖爐の上にアニエートカを寝かしました。その煖爐には、同じ笹草の上に、アニエートカとちやうど同じぐらゐ小さな、炭焼の娘が眠つてゐました。アニエートカは、すつと後になつてから、その笹草は佳い匂がした、蜂蜜の匂がしたと私たちによく話したものです。アニエートカは横になりましたが、眠れないで、しくしく泣いてゐました。彼女には父のことが悲しくもあれば、恐ろしくもあつたのです。すると、二時間ばかり経つて、父を苦めたあの三人の追剝が、この小舎にはいつて来たのを彼女は見ました。三人の中で眞紅の襦袢を着た、顔の大きな、彼等の頭は女房に近づいて言ひました。

「あゝ、俺たちや、何の獲物もなしに、一人の男を無駄に殺さなけりやならなかつた。本當に殺しちまつたんだが、たゞの一銭も見つからなかつた。」

かう言つて、眞紅の襦袢シヤツを着た男は、女房の亭主の炭焼を振り向き直りました。

「まったく何の獲物もなしに命をとつちまつた。」と檻褌服の仲間は言ひました。「たゞ無駄に、同胞の一人を殺しちまつた。」

炭焼の女房は、三人をぢろさる眺めながら笑ひました。

「馬鹿、何がおかしいんだ？」

「私や誰も殺すやうなことはしないから笑ふのさ。私や自分の魂に罪はつくないけど、お金は見つけてあるからね。」

「何の金を？ お前、何を笑談言つてるんだ。」

「ふん、私の言ふことが笑談だかどうか見て御覽よ。」

炭焼の悪黨女房は金包みを取りだして、金をみんなに見せました。その後で、アニエートカがどうして此處へ来たか、何を言つたか、どんなに泣いてゐたかとその有様を話しました。殺害者どもはすつかり歎んで、金を預けはじめました。まるで喧嘩のやうな騒ぎをしてから、卓に坐つて酒宴を開きました。一方の可哀相なアニエートカは、その話をすつかり聴いて、火炎ひめりの猶太人のやうに顛へてゐました。さあ、どうしたらいいのか？ 彼等の話で、父が殺されて道路に横は

つてゐることを知りました。と、馬鹿な小さい娘は、胸の中に、父の屍體が狼や犬に喰はれてしまふだらうといふこと、つないである馬は森のどこかへ逃げだして、それも狼に喰はれてしまふだらうといふこと、彼女自身はお金の守りをやり通さなかつた罪で牢屋へ入れられてしまふだらうといふことなどをまざまざと想像に描きました。

追刺どもは酔つぱらひましたが、まだ飲み足りずに、炭焼の女房を火酒ウイッヅカ買ひにやりました。彼等は火酒ウイッヅカと葡萄酒の代に女房へ五ループリ渡しました。彼等は他人の金でかうして飲んだり歌つたりするので、この悪者どもは飲む上にも飲むのです。そして酔ひ倒れるまでは止めないで、再び女房を酒買ひにやりました。

「朝まで飲みつゞけようぜ、」と彼等は叫びました。「金はこの通りふんだんにあるんだ、何も險約するこたあねえ。酒を飲み、汝の智慧を飲む勿れつてなあ！」

かうして眞夜中になり、みんなもうべろべろに酔つてゐるのに、女房は三度目の酒買ひに出されました。そして炭焼は起ちあがつて、家の中をよろよろと二足三足歩きました。彼は酔つて、足がふらつてゐました。

「おい、若えの！」と彼は言ひました。「あの小娘も片づけちまはなきやいけねえ。あいつを生か

しておいちゃ、まづ最初の證人になるからな。」

三人は相談した揚句、アニュートカは生かしておけない、證據をなくすために、殺してしまはなければならぬといふことになりました。もちろん、無邪氣な子供を殺すといふことは、人間がどんなに酔ひどれてるやうと、氣が狂つてゐやうと、おそろしい酷いことです。それで、彼女に手を下すのを誰に決めるかと、お互に、お前やれ、お前やれと繰返したり、押しつけ合つたりして、一時間も言ひ合つてゐました。お終ひに籤引で決めました。籤に當つたのは炭焼でした。彼は又もやコップに一杯ぐいと飲みほし、咳拂ひをして、ほかの部屋へ斧をとりにゆきました。

けれども、アニュートカは敏感な小娘でした。心持ちがとても單純でしたから、教育のある大人の考へるやうなことは、まるで違つた何事かを思ひつきました。神様が彼女に憐憫を惠ませ給ひ、その瞬間、彼女に良い考へをお與へになつたものか、それとも驚嘆のあまり鋭い機智がはたらいたものか、ともかく、彼女は、その考へを實行する段になつて、大人も及ばぬほど賢くなりました。

アニュートカはこつそりと起きあがつて、神様にお祈禱しながら、炭焼の女房が着せてくれた一枚の羊皮を手にとりました。さつきもお話しましたやうに、アニュートカの傍には彼女とちや

うど同じくらゐる小さな、炭焼の娘が眠つてをりました。彼女はこの小娘の上に羊皮をかぶせ、その小娘のジャケツをそつとぬがせて、自分にそれを着ました。すつかり身代りの假装が出来ました、頭もその小娘の被り物をつくり眞似してから、酔ひどれどもの側をうまくすりぬけて、小舎から出ました。その時、炭焼の女房は火酒を買ひに行つて、小舎にゐなかつたのは何より仕合はせでした。さも無かつたら、女の眼といふものは、鸚のやうに見透しのきくものですから、彼女は斧を逃れることは出来なかつたでせう。さういふ女房の眼は鋭いですからね。

アニュートカは小舎を出ると、出来るだけひた走りに走りました。夜通し彼女は森の中をあちこち迷ひましたが、曉方、やつと森の縁へ出られたので、今度は道路を一さんに走りました。すると、運よく書記のイエゴール・ダニールツチに行き會ひました。彼は魚釣をしようとして、釣道具を下げて、てくてくやつて來たのでした。アニュートカは事の顛末を話しました。彼は——魚釣りのことは放つておいて——すぐに引返し、急いで村の百姓たちを呼び集めて、炭焼のところへ向はせました。

百姓たちは森の小舎へ着きました。悪者どもは死んだやうに酔ひどれたまゝ、ごろごろと並んで眠つてゐました。炭焼の女房も酔つぱらつてゐました。そこで百姓たちは、あちこちと探して、

何より先に金を見つけ出し、それから煖爐の上に眼を移しました——そこは何たる有様でしたらう？ 炭焼の小娘は羊皮をかぶつて、箒草の上に横はつてゐましたが、頭のあたりは血の溜りになつて、斧で打ちのめされた跡が物凄く見られました。百姓たちは悪者どもと女房とを呼び起して後手に縛りあげ、縣の裁判所へ引きたてゝゆきました。女房は吼え聲あげて泣きましたが、炭焼はたゞ頭を振つて、かう言つただけでした。

「どうか、一杯でいゝから飲まして下せえ、頭痛がしてやりきれねえんです。」

その後、彼等は法廷にかけられ、嚴罰に處せられることになりました。

この溝河沿ひの森に起つた話の筋は、まあ、かういふ次第です。今では、もうその頃の光景も、ほとんど見られません。おや、いつの間にか日の暮れになりましたね。お話してる間、つないで置いた馬も、話に聞き入つてゐたやうに温順しくしてゐましたね。さあ、出かけろ！ 別嬪！ とつとと走れよ！ もつと迅く行けば、旦那が特別に駄賃を下さらあ。はい！ 別嬪！

牧笛

デメンチエフ農場の管理人メリトン・シシユキンは、縦林の蒸し暑さにうんざりしながら、蜘蛛の巣や縦の葉を身體中に一ぱいつけて、鐵砲を肩にして森の端れへと歩いていつた。番犬とセツター種との混血犬で、孕んでゐながら非常に瘦せてゐる牝犬のデムカは、後脚の間へ濡れた尻尾を垂れ下げて、鼻先を突き刺されまいとして氣を配つてゐた。どんより曇つた朝であつた。薄霧のかゝつてゐる羊齒や樹々の葉末から大きな雫がぼとりぼとり落ちて、森の濕氣の中に朽葉の強い匂が漂つてゐた。

林の盡きた向うには白樺の樹立があつて、その幹と枝との間に霧の立罩めてゐるのが遠くから見えた。その白樺の向う側あたりで、誰かゝ粗末な牧笛を吹き鳴らしてゐた。吹手は唯五か六の音色ばかりを吹いて、何の節まはしもつけずに、單調に長く引きのばした。そしてその上この音色の中には、何となく粗野な、非常に陰鬱な響があつた。

林が疎らになつて、樅の樹の間に白樺の若木の雜つてゐる草藪へ出ると、一群の家畜がメリトンの眼に映つた。前脚を網で結へられてゐる馬や、牝牛や、羊やが灌木の間をさまよひながら、枯枝をばちりばちり踏み鳴らして、藪の牧草に鼻面を突きつけてゐた。汚れた襤褸シャツを着て、帽子も被つてゐない一人の年取つた牧夫が、濡れた白樺の幹に寄りかゝつて立つてゐた。彼はちつと何事かを思ひ耽りながら地面を見詰めて、たゞ機械的に牧笛を吹いてゐた。

「爺さん、お早う！」メリトンは彼のがつしりとした大きな體や、肥つて血色のいゝ顔に似合はない細い嘎れ聲で挨拶した。「仲々笛が上手だね！ この家畜は誰のだい？」

「アルタモノフさんのでござす、」と牧夫は面倒臭さうに答へて、笛を懐中へ突込んだ。

「ちや林もアルタモノフさんのだらうね？」とメリトンはあたりを見まはしながら訊いた。「さうだ、アルタモノフさんのにちがひない。だが……すつかり路が分らなくなつちやつたんだ。藪でもつて顔をそこいら中引搔かれちやつたよ。」

彼は濡れた地面に坐つて、巻煙草を新聞の切端で巻きはじめた。

彼の音聲と同じやうに、この男の身に備はつた凡ては、その眼付も、釦も、短く刈り込んだ大きな頭にやつと載つかつてゐる小さい縁無帽も、彼の背の高さや、胸廓の廣さや、肥つた顔とは

釣合ひがとれなかつた。彼が物を言つたり微笑んだりすると、彼のぶくぶく肥つた剃りつけた頭と體中の容子とに、何となく女のやうな臆病さと柔和さとが現はれた。

「まだ燕麥の收穫も済まないのに、頻りなしに雨が降るね、」と彼はあつち此方を見まはしながら言つた。「あゝ何といふ天氣だらう！」

牧夫は霧雨の降つて來た空や、森や、管理人の濡れた外套やを眺めて、ちつと考へ込んだ儘、何とも言はなかつた。

「夏中同じ有様だね、」とメリトンは溜息をついた。「百姓達には仕事の都合が悪いし、且那方にも面白くないし。」

牧夫は再び空を見上げて、ちよつと考へてゐた。そして一言一言噛みしめるやうな調子でゆつくりと言つた。

「何もかも皆同じやうになつて行くんでさ……何もいゝ事はやつて來やしませんよ。」

「お前のところはどんな風だね？」とメリトンは巻煙草に火をつけながら訊いた。「アルタモノフの開墾地で山鶉が雛を孵へしたのを見なかつたかい？」

牧夫は直ぐには答へなかつた。彼は再び大空やそこ等あたりを眺めて、ちよつと考へながら眼

をしば叩いた……明らかに彼は、自分の言ふ一語々に大きな意味をもたせて、その値打ちを増すために、一種勿體をつけた調子で、ゆつくり口を開かうとしてゐるらしかった。彼の顔の表情には、いかにも年寄らしい鋭い頑固なところがあつた。そして眞中に鞍形の窪みをもつた鼻と仰向けになつた鼻孔とが、狹猾さうな皮肉な印象を示してゐた。

「いゝや、私や見ませんでしたよ。」と彼は言つた。「獵師のエリヨームカは、イリーナの祭日にブストーシケの近くで雛兒を一羽見たと云つてたが、奴は嘘を吐いたんでせうよ。鳥なんぞ滅多にゐませんや。」

「さうだね、兄弟、鳥は滅多にゐない……全く何處にも少くなつたなあ！ 普通の考へでこんな處で鐵砲を打つのは、するぶん馬鹿げきつてるね。獲物になるやうな奴は一羽もゐやしない。時たまゐる奴と來たら、打つ値打ちのない雛兒だ。人にも見せられないやうな詰らない鳥なんだからね。」

メリトンは笑ひ聲をあげて手を振つた。

「どういふわけだが世の中の事がだんだん變になつて行くね。この頃の鳥共は全く不思議だ。卵を抱く時期が馬鹿に遅くなつて、中にや、セント・ペテル祭頃になつても未だ雛を孵さないのも

ゐるね！」

「何もかも皆同じやうになつて行くだ、」と牧夫は顔を仰向けながら言つた。「去年も獵が少なかつたが、今年は尙と少くなりましたよ。これでもう五年も経つたら、一羽も取れなくなつてしまふでせう。私の見るところぢや、獵が駄目になるばかりぢやねえ、鳥と名のつくものが一羽もゐなくなるでせうよ。」

「さうだ、」とメリトンは、ちよつと考へた後で同意した。「そりや實際だ。」

牧夫は苦々しげに笑つて、頭を振つた。

「どうしちまふだか、全く不思議でさ！」と彼は言つた。「私は覚えてるが、二十年ぐらゐ前にや、鶯鳥や、鶴や、野鴨や、松鷄なんぞが此處いらにや一面に寄つてたもんだつたが！ 且那方はよく鐵砲打ちにやつて來ちや、しよつ中ぼんぼん、ぼんぼん言はせどほしでしたよ。ホド鶉や鶉は取り放題ゐたし、小鴨や水鳥はまるで掠鳥か雀のやうに澤山ゐたもんでさ！ それが皆どうしちまつたんだかね、今ぢや生餌を食ふ鳥さへゐなくなりましたよ。鶯だの、鷹だの、梟だのも、みんな何處かへゐなくなつちまつた……獸の奴等も少なくなりましたよ。今ぢや熊や獺ばかりぢやねえ、狼や狐だつて滅多に見られねえ。それに昔や麋さへゐたもんでさ！ 私や四十年も續けて

神様の仕事を氣をつけて見てましたが、何もかも皆同じやうに變つて行くだ。」

「どんな風に？」

「だんだん悪い方へ。詮り滅びて行くだね……神様のお審きの日が近づいたんでさ。」

爺さんは縁無帽を被つて、大空を見詰めはじめた。

「悲しいこつた。」と彼はちよつとの間黙り込んだ後で嘆息した。「あゝ、ほんとに悲しいこつた！世界はわし等が造つたのぢやねえから、いふ迄もなくそりや神様の思召だが、でも悲しいこつた。たつた一本の樹が枯れたり、牝牛が一匹死んだりしても、わし等は悲しくなるのに、世界中の物が無くなつたら、どんな事になるでせう？主イエス様のお恵みがありますやうに！太陽も、大空も、森も、河も、獸共も——みんなそれぞれ何一つ飲けてならねえやうに具合よく造り出されたんでさ。それぞれ皆當てがはれた仕事があつて、自分の役目を知つてゐるのに、それが皆滅びてしまはなけりやならねえんでさ。」

悲しげな微笑みが牧夫の顔に閃めいた、そして彼の臉がぱちりぱちり動いた。

「この世が減びて行くのだ——とお前は云ふんだね、」とメリトンは思ひ沈みながら言つた。「成程、世の終りが近づいてゐるのかも知れない。けれども、鳥の有様だけでそれを判断することは

出来ないよ。鳥の居なくなるのが、その知らせだとは私には思へないね。」

「鳥ばかりでは無えでさ、」と牧夫は言つた。「獸共でも、家畜でも、蜜蜂でも、それから魚でも……矢張りさうでがすよ……わしの言ふ事を本當にしなさらねえなら、年寄に訊いて御覽なせえ。昔の時分から見ると、魚がまるでゐなくなつたと皆言ふでせうよ。海にも、湖水たも、河にも、魚が年々少くなつて行きますだ。わしやよく憶えてるが、わし等のベスチャンカ河ちや、一アルシンもあるやうな鱒がとれたもんでさ。鱒でも、鯉でも、魚といふ魚が始終姿を見せましたよ。所が、けふ日ちや、六時ぐらゐの小ぼけな鱒か鱒でも捕れりや大した漁でさ。お話になるやうな鯉なんぞ一匹もゐやしませんぜ。年々魚が減るばかりで、今に一匹もゐなくなつてしまふでせうよ。それから河を御覽なせえ……河の水がだんだん涸れて行きますだ。」

「さう、全く河の水は涸れて行くね。」

「さうですとも、わしのいふ通りでがすよ。年々浅くなるばかりで、以前あつたやうな深い淵は一處もなくなりましたよ。それに向うの藪を御覽なせえ、」と爺さんは一方を指しながら言つた。

「あすこの向うに堰返しと言つてゐる古い河床があります。わしの親父の時代にや、ベスチャンカはあすこを流れてゐたもんでがすが、今ちや御覽なせえ、水がすっかり絶えてしまつてま

だんだん流れが變つて、今にすつかり水が乾上つてしまふでせうよ。ケルガソウエの向うにや、沼や池がいく處もあつたが、どうなつちまつたものかね？ 小河なんぞも何うなつたかさ？ この森にも小河が一筋流れてゐましたよ。百姓共が籃を下して罾を捕つたほど深い小河で、野鴨がよくそこで冬籠りしてゐたつけがね、けふ日ぢや、春の雪解けの時でさへ、水が少くつて小舟一つ浮かせることも出来ませんや。全くですよ、あんた様、どこでもあんたの好きな處を見て御覽なせえ、何處も彼處も萬事が悪くなつてゐるま、何處も彼處も。」

沈黙が來た。メリトンは一點をちつと見詰めながら思ひに沈んだ。彼は凡ての物を蔽うて行く滅亡の手のまだ觸れずに残つてゐる或一つの場所を、この自然の中に探し出したいと思つてゐた。霧と斜めに降る雨脚との上に、不透明な硝子の上を照らすやうに光の斑點が輝いたが、直ぐにまた消え去つた——それは昇り行く太陽が雲を破つて地上を覗かうとしてゐるのであつた。

「さう、森も矢張り……」とメリトンは呟いた。

「森もさうでさ、」と牧夫は繰返した。「樹は伐り倒されたり、焼かれたり、枯れたりしてしまつて、若樹はちつとも大きくなりませんよ。若樹が伸びると直ぐ伐り倒されるんでさ。伸びると直ぐ伐り倒し、伐り倒して、一本無しになるまで伐つてしまふんでさ。私や農奴解放の時から此

方、すつと村の組合の家畜の番人をして來ましたし、解放の前にや、私は地主様の家畜の番人でしたから、こゝいらの森のことはよく知つてますよ。私や生れてからひと夏だつて此森にゐなかつたことはねえんですからね。そしてしよつ中神様のなさる事に氣をつけてゐたんでがすよ。私や若い時分から氣をつけて見てゐたので、それと分つたんでさ。で、私は何もかも皆滅びて行くんだといふ考へを持つやうになつたんですよ。まあライ麥でも、草でも花でも見て御覽なせえ、みんな同じやうに悪くなつて來てますぜ。」

「でも、人間だけは善くなつたよ、」と管理人は言つた。

「どんな風に善くなりましたね？」

「惻巧になつたよ。」

「成程、惻巧にはなつたかも知れませんが、お若いの。けれども、惻巧が何のためになるね？ 直ぐも滅びなけりやならねえ羽目に立つてる人間に、惻巧がどんな役に立ちますね？ 死ぬのちや智慧も何にも用はありませんや。獵がなけりや、獵師に智慧があつたつて、何にもならねえちやありませんかよ？ 私の考へにすると、神様は人間に智慧をお授けになつた代りに、力を取り上げておしまひになつたぢね。人間は弱くなりましたよ、恐ろしく弱くなりましたよ。まあ、

わし等を御覽なせえ……私は半文の値打ちもねえ、村中で一番下つ葉の百姓だが、お若いの、私にや力がありますだ。どうです、私やもう七十ですがすよ、だが、毎日々々家畜の番をしてゐます。二十カベツクで夜番までして、眠りもしなけりや、風も引きませんや。私の俵は私よりや捌巧だが、私の仕事をやらして御覽なせえ、翌日はもう給金を上げて呉れるといふか、さも無けりや、お醫者へ罹るかするでせうよ。全くですよ、私や麵麩のほかにや何にも食べねえんです、何故と言つて、「今日も我等に日々の糧を與へたまへ」と聖書に書いてある通りでさ。私の親父も麵麩のほかにや何にも食べませんでしたよ、私の祖父さんもさうでした。でも、けふ日の百姓は、お茶や火酒ウツカや、白麵麩を食ふにちがひありません。おまけに宵から曉方まで寝るし、お醫者には通ふし、出来るだけ旨い物食ひもします。何故かといふと、人間が意氣地無しになつたからですよ、辛抱する力がねえからですよ。奴等は眠らねえやうにしたいと思つたつて、眼の方でつぶつて來るんだから——何にも役に立ちやしませんや。」

「そりや全くその通りだ。」とメリトンは同意した。「この頃の百姓は何の役にも立ちやしない。」
「悪いことを隠してゐるのは良くねえから言ひますが、わし等は年々悪くなるばかりですよ。それから且那がたの方を考へて御覽なせえ、百姓たちよりや尙一さう弱くなつてゐなさるだ。この頃

の且那方は何でも知つてらつしやるが、役體もねえことを幾ら知つてたつて、それが何になりませすかよ？ その容子を見ると氣の毒になりますよ……ハンガリア人が佛蘭西人のやうに、瘦せかけた、弱々しい小男になつて、威嚴もなけりや押出も利かず、たゞ且那と云ふ名ばかりだね。これといふ役目はなし、何をしようといふ仕事もなし、何をしたいと思つてゐるのか譯が分りませんや、釣竿をもつて坐り込んで魚を捕つてゐるとか、寝轉んで本を讀んでるとか、百姓たちの處へ出かけて行つて、取留めもねえ饒舌おしゃべりをしてるとか、そんな事ばかりやつてゐなさるだ。それから食へねえ連中は、みんな番頭や書記に雇はれて行くだ。そんな風にして一生を無駄に過してゐるだからね。本當に役に立つ仕事をしようなんて考へは持つちや居なさらねえんだ。昔の且那方は、半分は將軍様だつたが、今の且那方は——やくざ者ばかりでさ。」

「此頃の紳士はみんな貧乏してゐるよ、」とメリトンは言つた。

「神様が力をお取上げになつたから、貧乏になつたんでさあ。神様に逆ふことは出来ねえからね。」

メリトンは再び一點をちつと見詰めた。ちよつとの間思ひ沈んだ後で、彼は眞面目な、分別のある人々が嘆息する時と同じやうに、ぼつと溜息をついて、頭を振りながら言つた。

「どういふ譯でさうなるんだらう？ 私たちはさまたまな罪を犯したり、神様を忘れたりした……だから凡ての物のお終ひになる時が来たのかも知れない。詰り世界は永久に續くことは出来ないんだ——世界も休息をしなければならぬ時が来たんだ。」

牧夫は溜息をついて、面白くもない話はお止めにしようと言はぬばかりに、白樺の傍から離れて、黙つて牝牛の數を算へはじめた。

「ヘイ、ヘイ、ヘイ！」と彼は叫んだ。「ヘイ、ヘイ、ヘイ！ 厄介な畜生だ！ 藪の中へはいりこみやがつたな。チュ……リュ、リュ！」

腹立たしげな顔付をして、彼は家畜を呼び集めるために藪の中へはいつていつた。メリトンは起ちあがつて、森の縁に沿うてそろそろ歩き出した。彼は足元の處をちつと見詰めながら、思ひに耽つてゐた。彼は尙も死滅の手に觸れられずに残つてゐる何物かを考へ當てようとしてゐた。斜めに降る雨の上を、再び光の斑點が滑つていつた。それらは樹々の頂で踊つて、濡れた葉の間に消え去つた。ダムカは或る藪の下に一匹のはりなみ狷を見つけて、主人の注意を惹かうとして吠えたり唸つたりした。

「あんたは日蝕を見なすつたかね？」と牧夫は藪の中から聲をかけた。

「あゝ、見たよ、」とメリトンは答へた。

「おゝ！ みんなは日蝕のあつたことを嘆いてをりますだ。ありや天にも騒動のある證しるしでさ。何のわけもないのに、日蝕なんぞが起るはずはありませんよ……ヘイ、ヘイ、ヘイ！」

森の縁へと家畜を追ひ立てながら、牧夫は白樺の幹に背中をもたせかけ、大空を振り仰いで、懐中からのろくこと笛を取りだして吹きはじめた。前の時と同じやうに、彼は唯機械的に五か六の調子しか吹かなかつた。さながら今初めて、笛を手にしたかのやうに、その音色は何の調子も節まはしもなしに、たゞ矢鱈にあたりへ響き渡つた。が、この世の滅亡について考へ耽つてゐるメリトンには、その音色の中に、聞くに堪へないやうな不快な物悲しい響があるやうに思はれるのであつた。顫へては消え去つて行く高い鋭い音色は、さながら笛その物が憂愁に戦おのいて、悲しげに咽び泣くかのやうに思はれた。その間に低い音色は、何故か、霧や、靄蒼とした樹々や、灰色の大空について物語つてゐるかのやうに思はれた。この音色こそ、こんな雨空と爺さんと彼の述懐とに適はしいやうに思はれた。

メリトンは胸中の不平をこぼしたくなつた。彼は爺さんに近づいて、彼の憂はしげな皮肉な顔付とその笛とを眺めながら呟いた。

「それに暮らし向きもだんだん辛くなるばかりだね、爺さん。まったく生きて行くのも困難になった。飢饉や、貧乏や……家畜の疫病や、いろいろな病氣や……私たちは貧乏のために踏みつぶされてゐる。」

管理人のぶくぶくした顔が赤くなつて、悲しげな女々しい表情を浮べた。彼は漠然とした感情を言ひ現はす言葉を探し出さうとするやうに指をひろげながら續けた。

「子供が八人と女房と……それに、私は母親がまだ生きてゐるんだよ。そして私の俸給はといへば月に十ループリで、しかも食扶持は此方持ちなんだ。女房は貧乏のために悪魔のやうになつてゐるし……私は飲んだくれてゐる。私は分別のあるしつかりした男で、教育もあるんだ。落ちついて家に坐つてゐなけりやならないんだが、かうして鐵砲をかついで大のやうに一日うろつきまはつてゐる。それといふのが、ぢつと辛抱してはゐられないからなんだ。私の家と來たら實に忌々しいんだ！」

つい舌が滑つて、言はうと思つたこととは全然別なことを饒舌つたのに氣がついて、管理人は手を振りながら苦々しく言つた。

「もし世界が減びるものなら、早く減びてしまふがいいんだ。愚圖々々伸ばして、たゞ徒らに人

間を苦める必要は少しもないんだから……」

爺さんは唇から笛を離し、一方の眼をつぶつて、その小さい管穴を覗き込んだ。その顔付には物悲しい色が浮んで、涙のやうな雫が流れてゐた。彼は微笑んで答へた。

「悲しいこつた！ おゝ、本當に悲しいこつた！ 地面も、森も、大空も、いろいろの獣や鳥ども——みんなそれぞれ用があつて造り出されたんだ。みんなそれぞれ智慧を持つてゐたんだ。それが皆減びてしまふだ。それに中でも、人間は一ばん可哀相さね。」

大鎌の雨の降つて來た音が森の中に聞えた。メリトンは音のする方を眺めて、上衣の釦を残らずかけながら言つた。

「どれ、私は村へ歸らう。左様なら、爺さん。お前の名は何ていふんだね？」

「貧乏人のルカ。」

「ぢや左様なら、ルカ！ いろいろ話してくれて有難う。ダムカ、來い、來い！」

牧夫と別れると、メリトンは森の縁を辿つて、それから次第に沼地になつてゐる牧場へと丘を下つた。そこでは足跡の窪みに水が溜り、まだ青々として艶のある沼蘆が、さながら踏みじられるのを恐れるやうに、地面に倒れてゐた。爺さんの話に出た沼の向うのベスチャンカ河の岸に

は、柳の列が立つてゐた。そしてその柳並木の向うには、霧で青黒く見える一軒の百姓家があつた。あたりの光景は全然避けることの出来ない悲しむべき時の近づいてゐることを示してゐた、野は暗くなり、地上は泥濘ぬかるつて冷めたくなり、泣いてゐる柳は尙一さう悲しげになつて、その幹に涙が流れてゐるやうに見える時の近づいてゐることを。たゞ鶴だけは凡ての惨事から離れてはゐるが、彼等でさへも、自分たちの幸福であることを見せつけるのは、憂ひに沈んでゐる自然を辱めることになりはしないかと恐れるやうに、空高くその悲しい寂びしい鳴聲を響かせる時の近づいてゐることを。

メリトンは河の方へと靜かに通りながら、だんだんと背後に遠ざかりゆく牧笛の響きに耳傾けた。彼は尙も胸中の不平をこぼしたいやうな氣がした。彼は悲しげにあたりを見まはして、大空や、地面や、太陽や、森や、彼のダムカを堪へ難いほど傷ましく思つた。そして牧笛の高い長つたらしい音色が、咽び泣きのやうに空氣を顫はしながら聞えて來た時、彼は自然の支配の不當に對して、異常な苦しさで腹立たしさとを感じた。

高い音色が顫へて、ばつたりと途絶えた。そしてそれつ限り、牧笛はもう聞えなかつた。

獵師

ぢりぢりと燒きつくやうな熱い日であつた。空には一片の雲もなかつた……日に照りつけられた草群は萎れきつて、赤枯れたやうになつて……雨が降つても最早青々と生きかへることはなさうに見えた……林は森としづまり返つて、その頂邊てつばんから何物かを見詰めてゐるかのやうに、又は何物かを待ち望んでゐるかのやうに、ぢつと立つてゐた。この開墾地の端れを、赤シャツを着て、誰かのお古の霜降りスズメの下袴ズボンに長靴をはいた、丈の高い、肩の狭い、年頃四十格好の男が、のそりのそり足をひき摺るやうにして歩いてゐた。右手にはこの開墾地の草原があり、左手には實つた裸麥の黄金の海が遠くの方まで擴がつてゐた。彼は誰か氣前のいゝ若紳士からもらつたらしい前庇の突立つた乗馬用の白いキャツプを、綺麗な赤毛の頭に氣取つた風にかぶつて、眞赤になつて汗を流してゐた。肩には松鷄まつどりを入れた獲物袋を、はすかけに掛けてゐた。手には鑿金を上げた二銃身の鐵砲を下げて、先へ立つて叢の中を嗅ぎまはりながら走つてゆく彼の忠實な老犬の方

へ眼をくばつてゐた。あたりは森閑として、何の物音も聞えなかつた……あらゆる生物は、暑熱を避けるために何處かへ隠れてゐた。

「イエゴール・ウラーシツチ！」不意にかう呼んだ物らかな聲が獵師の耳にはいつた。

彼は吃驚して、あたりを見まはしながら顔をしかめた。彼の傍には、さながら地の底から湧いて出たやうに、顔色の蒼白い、三十格好の女が、手に草刈鎌を下げて立つてゐた。

「おゝ、ペラーゲヤ、お前か？」と獵師は立ち停つて、しづかに銃の撃金を下しながら言つた。

「ふむ……どうしてお前は此處へ來てるんだ？」

「村の神さんたちが此處へ雇はれたもんだから、私も一緒に來たんだよ……日雇取りにさ、イエゴール・ウラーシツチ。」

「あゝ、さうか……」とイエゴール・ウラーシツチは呟いて、靜かに歩き出した。

ペラーゲヤは彼の後からついていつた。二人は二十歩ばかり黙つて歩いた。

「ずゐぶん久しく遇はなかつたねえ、イエゴール・ウラーシツチ」とペラーゲヤは獵師が肩をしやくり上げるのを物憂しい眼付で眺めながら言つた。「お前さんは復活祭の時に……復活祭の時にほんの一寸私の家へ水を飲みに来たつきり……恐ろしく酔つぱらつて、私を怒鳴つたり打つた

りしてさ、何處かへ行つちまつた限り……姿も見せないんだもの……私はどんなに待つてたか知れないよ……お前さんを探しぬいてゐたんだよ。あゝ、イエゴール・ウラーシツチ、イエゴール・ウラーシツチ！一度ぐらゐ來てくれたつていゝぢやないかよ！」

「行つたつて、何にも用はねえからな。」

「そりあ、お前さんには用はないかも知れないけど……こゝの見まはりをして……いろいろ氣をつけてゐなけりやならないんだから、仕方がないけど。お前さんは管理人なんだからね……まあお前さん、松鷄を撃つたんだね、イエゴール・ウラーシツチ。ぢや、腰を下して休んだつていゝだらう！」

こんな事を言ひながら、ペラーゲヤは無邪氣な小娘のやうに笑つて、イエゴールの顔を見あげた。彼女の顔は譯もなく嬉しさに輝いてゐた。

「うむ、それぢや、ちよつと休むかな？」とイエゴールは無關心な調子で言つた。そして二本の縦の樹の間の場所へ腰を下した。「何だつて突立つてゐるんだ。お前も腰を下したらいゝだらう。」

ペラーゲヤは日脚の屈かない處へ坐つて、嬉しさに含恥みながら、微笑みの浮んで來る口を手で掩ひ隠した。沈黙の中に二三分過ぎた。

「一度ぐらゐ来てくれたつていゝぢやないかよ、」とペラーダは言つた。

「どうしてよ？」とイエゴールは帽子をぬいで、赤くなつた額を手で拭きながら、溜息をついた。「行つたつて何にも用はねえ。一時間も二時間もかけて行くのは時間の費えだ。お前を困らせるばかりだからな。」と言つて、しよつ中村に住んでゐることあ俺にや迎も我慢が出来ねえんだ……お前も知つてるやうに、俺や贅澤な男なんだからな……寝るにや寢床が欲しいし、美味いお茶が飲みたいし、面白い話聞いてえんだからな。俺や何でも小ざつぱりとして暮らして行きてえんだ。所が、お前は村の塵芥溜のやうな中で、貧乏暮らしをしてゐるんだから……俺にや一日だつて辛抱は出来ねえ。假に俺がお前と一緒に暮らしてゐなけりやならねえといふ法律でもあるなら、俺や家へ火をつけるか、首でも縊つてしまふぜ。俺や子供の時から、色戀のことは勝手氣儘にしてたんだから、どうも仕方がねえ。」

「今お前さんは何處にゐるの？」

「こゝの旦那のドミトリイ・イワレーメイツチの家で獵師になつてゐるんだ。俺は旦那の骨牌の對手よ、旦那はそれが何よりも氣に入つて俺を置いてるんだ。」

「そりやお前さん良くない事だよ、イエゴール・ウラーシツチ……ほかの人たちのは、ほんの慰

み事だけれど、お前さんののは、まるで本式の商賣みたいだからね。」

「お前なんぞにや分らねえよ、お馬鹿さん、」とイエゴールは懶げに空を眺めながら言つた。「お前なんぞにや分りつこねえ、俺がどんな男かつてことは、お前が死ぬまで分りやしねえ……お前は俺のことを、馬鹿な無頼漢だと思つてるが、物の分つた者から見ると、俺は村中一番の射撃の名人なんだ。旦那はそれを知つて、雑誌にさへ俺のことを書いて出したんだぜ。こゝらにや俺と較べ者になるやうな獵師は一人だつてゐやしねえ……そして俺がこれ程名人なのは、俺が贅澤好きの男で、村の仕事を馬鹿にして威張つてゐるからぢやねえ。お前の知つてる通り、俺は子供の時から、鐵砲と犬を離れた商賣をした事がねえんだ。俺は鐵砲を取り上げられると、何時も釣に出かけたもんだ。釣道具を取り上げられると、手で鳥や魚を捕まへたもんだ。それから又博勞もやつたし、金が持てるやうになつてからは家畜市にも出かけたもんだ。こんな風に、百姓が獵師や博勞の仲間入りをすりや、もう野良仕事とはおさらばにきまつてらあ。一度自由な心持ちになり切つた人間に、その心持ちを止めると言つたつて、そいつは駄目なこつた。早い話が、誰か旦那方が役者になるとか畫家になるとかしたら、役人や地主にやなれめえ、それと同じ事よ。お前は女だから分らねえが、男にやちやんと此處が分つてゐるんだ。」

「私にや分つてるよ、イエゴール・ウラーシツチ。」

「分つてるなら、泣くことあねえ……」

「私は泣いてや……泣いてやしないよ、」とペラーダは顔をそむけながら言つた。「あんまり罪が深いよ、イエゴール・ウラーシツチ！ とに角、一日ぐらゐこんな可哀相な私と一緒に暮らしてくれつつていゝぢやないか、お前さんと結婚してからもう十二年にもなるのにさ……私たちの中には愛情つてものがちつともないんだもの……私は……私は泣いてやしないよ。」

「愛情……」とイエゴールは頭をがりがり掻きながら呟いた。「愛情なんぞある譯がねえさ。俺達の本當の夫婦ぢやねえ、たゞ名前だけの夫婦だからな。お前の眼にや俺は無頼漢むらいぢやんで、俺から見や、お前は物の分らねえ全くの百姓女だ。これが好い配偶つれあひだなんて言へるか？ 俺は自由な、贅澤好きな、身持ちの良くねえ男だし、お前は裸足で歩いて、年中背中を屈めてゐる日雇取りの女だ。ちよつと自分で考へて見ても、俺はいろいろの狩獵の名人で、それをお前が情なさゝうにしてゐるなんて……それで夫婦なんて言へるか？」

「でも、私たちが結婚したぢやないか？」とペラーダは泣きじやくつた。

「好きこのんで結婚したんぢやねえ……お前は忘れたのか？ セルゲイ・パウロイツチ伯爵とお

前自身のお蔭でさうなつたんだぜ。俺が伯爵よりや射撃が上手だもんだから、伯爵はそれを妬んで、一箇月も續けさまに俺を酒浸しにしたんだ。人間が酔つぱらつてる時や、宗教を變へさせることだつて出来るくれえなもんだ。女房を持たせるくれえ雑作はねえ。そこで俺を追つ拂ふために、俺が酔つぱらつてるのを時機ときに、お前を女房に持たせたんだ……立派な獵師に日雇女をおつ附けたんだ！ お前は俺が酔つぱらつてたのを知つてたんだ。だのに何故俺の女房になるのを承知したんだ？ お前は奴隷ぢやなかつたんだから、斷はらうと思へば斷れたんだ。もつとも、日雇女が立派な獵師の女房になるのは仕合せにや違えねえが、お前はよく考へて見なけりや可いけなかつたんだ。だから今になつて惨あじめな思ひをして、泣くやうな事になつちまつたんだ。伯爵にとつちやほんの笑いたづら戯わづらで、お前にとつちや不仕合せだが……自分を恨むより仕方がねえ。」

沈黙が來た。三羽の野鴨が開墾地の上を飛んでいつた。イエゴールは眼を見張つて、それが微かな三つの點々のやうになつて、遠く森の彼方へ消え去つてしまふまで見送つてゐた。

「お前の暮らしはどうなんだ？」と彼は野鴨からペラーダへ眼を移しながら訊いた。

「私や日雇稼ぎに出てゐるんだよ。それから冬は育児院から子供を一人連れて來て、牛乳で育てゝゐるんだよ。一箇月一ループリ半くれるからね。」

「おゝ……」

再び沈黙が来た。さくさく草を刈つてゐる邊から静かな歌聲が聞えて来たが、直ぐに止んでしまつた。暑苦しくつて、歌もうたつてはゐられないのであらう。

「お前さんはアクリーナに新しい小舎を建て、やつたんだつてねえ、」とペラーゲヤは言つた。

イエゴールは何とも答へなかつた。

「ちや、あの女はお前さんに可愛がられてゐるんだね。」

「お前の廻り合せが悪いんだ、何も運だない」と獵師は伸びをしながら言つた。「だからなあ、お前、我慢してゐなくつちや可いねえ。だが、すっかり饑舌をし過ぎちやつた、もう左様ならし
よう……俺は晩方までにポルトーウオまで行かなければならねえんだ。」

イエゴールは起ちあがると、伸びをして、鐵砲の釣皮を肩へかけた。ペラーゲヤも起ちあがつた。

「そして何時村へ来るの？」と彼女は優しく訊いた。

「何時つて、行くつもりもねえよ。俺や素面で行くやうな事はねえからな。お前は俺のやうな酔つばらひにや離れてゐる方がいゝんだ。俺が呑んだくれてる時や、まつたく亂暴だからな。ちや、

左様なら！」

「左様なら！ イエゴール・ウラーシツチ。」

イエゴールは頭の後方へ帽子を被つて、犬を呼びながら向うへ歩いていつた。ペラーゲヤは立停つた儘、ちつと彼を見送つてゐた……彼女は揺れあがる彼の肩や、その氣取つた帽子や、のろくさした懶げな歩き付やを見た。そして彼女の眼は悲しさと優しい愛情とで一ばいになつた……彼女は自分の亭主の丈の高い、すらりとした姿の上に眼を彷彿はせて、その眼付で彼を接吻したり抱擁したりした……彼はそんな眼付で見られてゐることを覺つたかのやうに、ふと立停つて、背後を振りかへつた……彼は何にも口はきかなかつたが、その顔付や、揺すり上げる肩付から察して、彼女は彼が何か言ひたがつてゐる容子を見て取つた。彼女はおぼおぼと彼に近づいて行つて、哀願するやうな眼付で彼を見詰めた。

「これを持つてくが好い、」と彼は眼をそらしながら言つた。

彼は揉みくちやになつたルーブル紙幣を彼女に與へた。そして急いで其處を離れた。

「左様なら、イエゴール・ウラーシツチ、」と彼女は我れともなく紙幣を受取りながら言つた。

彼は張りつめた革紐のやうに直真ぐな路を向うへ歩いていつた。彼女は蒼い顔をして、彫像の

やうにちつとして、一歩々々遠ざかつてゆく彼の姿を見送つてゐた。が、次第に彼のシャツの赤い色は下跨スベシの黒い色と融け合つて行き、彼の足付もいつか判然と分らなくなり、犬と長靴との見分けがつかなくなつてしまつた。たゞ帽子だけがよく見えるだけであつた、すると……不意にイエゴールは方向を變へて、開墾地の中へ急いではいつて行つたので、帽子が樹蔭に隠れてしまつた。

「左様なら、イエゴール・ウラーシツチ、」とペラーダヤは口の中で言つた。そしてもう一度その白い帽子を見ようとして、爪先立てゝ伸びあがつた。

技 術

陰鬱な冬の或る朝。

そこ此處に雪斑の散らかつたヴィストリヤンカ河の、滑らかな、きらきら光る表面に、二人の百姓が立つてゐた。いちけた姿の小男のセリョージカと教會の番人マトウエイとであつた。襤褸服をまとつた、足の短い、年頃三十ぐらゐの見すばらしいセリョージカは、氷の上を腹立たしげに眺めてゐる。毛のぬけた犬のやうに汚らしく擦り切れた羊皮の外套から、毛の房がぶらぶら下つてゐる。彼は二本の尖つた棒で出来てゐる羅針機コンパスを両手で持つてゐる。新しい羊皮の外套とフエルトの長靴をつけた、ちよつと容子のいゝ爺さんのマトウエイは、溫和な碧い眼をあげて、急傾斜の土堤から向うに家々の點綴する畫のやうな村の部落を眺めてゐる。手には鐵槌かたてを下げてゐる。

「やい、そんな風に腕を組んで夕方まで立つてるつもりかい？」とセリョージカは沈黙を破つて、

腹立しげな眼をマトウエイの方へ振り向けながら言ふ。「お前はこゝへ立ちん棒に來たのか、それとも仕事に來たのか？ 導化爺さん」

「まあ、お前……やつて見せてくれよ……」とマトウエイは濃厚しく眼をしば叩きながら口籠る。

「やつて見せろつて……いつもの手だな、やつて見せろで、俺にやらして了ふ氣でゐやがる。自分でやつて見る氣にならねえかよ！ やれよ、羅針機で輪を描きや、それでいゝんだ！ 輪を描いとかなきや、氷を突碎すわけにいかねえ。さあ、やれよ！ 羅針機をあてがつて。」

マトウエイはセリヨージカの手から羅針機をうけとつて、同じところを烈しくほじくつたり、兩腕を張つて、向きを構はず引きすつたりしながら、氷の上におづおづと輪を描きはじめる。セリヨージカはさも馬鹿にしたやうに眼をくるくるさせて、彼の困惑と不器用とを面白がつてゐる容子を見せる。

「え、えい！」と彼は腹立たしさに呟く。「お前にや、それさへやれねえのか？ まつたく腑抜けな百姓だな、木偶漢！ お前は鷺鳥を飼ふぐらゐが精一ばいで、ヨルダンを作る柄ぢやねえな！ 羅針機をこつちへよこせ！ こつちへよこせつたら！」

セリヨージカは汗をかいてゐるマトウエイの手から羅針機を掴みとつて、見る間に、片方の踵で輕快に體を旋回させながら、氷の上に圓を描く。新しいヨルダンの祭場は、これでもう下準備が出來た。あとは氷に穴をあければいゝのである……

が、セリヨージカは、その仕事にかゝる前に、長い間、勿體ぶつたり、我儘を言つたり、毒口を叩いたりする……

「俺にや、お前のために働く義理はねえ！ お前は教會に雇はれてるんだから、この仕事はお前の役だ！」

明らかに彼は、一年にたゞ一度、彼の技術に依つて、全教區を驚嘆させる稀有の才能を彼に授けてくれた運命を、その運命の與へてくれた特異の地位を樂しんでゐるのである。哀れな濃厚しきマトウエイはいろいろな毒舌や、彼に浴びせられる侮蔑の言葉を、ぢつと聽いてゐなければならぬ。セリヨージカはさも屈托したやうに、腹立たしい容子で仕事にかゝる。彼は怠ける。やつと一つ圓を描いたばかりで、彼はもう村へお茶を飲みに行きたくなる、方々へ寄つたり、無駄口を叩いたりしたくて堪らぬ……

「俺あ直に歸つて來るからな、」と彼は巻煙草に火をつけながら言ふ。「その間に、お前は、突立つ

て鴉を數へてゐる代りに、何か腰掛けるものを持つて來たり、こゝらを掃いたりしておくがいや。」

マトウエイは一人残される。空氣は灰色で、鋭いが、靜かは靜かである。河土堤の上に點々と立つてゐる百姓家の蔭から白亜の會堂が鮮やかに覗いてゐる。その黄金色の十字架のまはり人眞似鳥が絶えず輪を回して飛んでゐる。村の一方の側は河土堤が崩崖になつて、險しく斷り立つてゐる。その斷崖に足を縛つた一頭の馬が、眠つてゐるのか、思ひに沈んでゐるのか、まるで石像のやうにちつと立つてゐる。

マトウエイも呆然と待ちあぐみながら、彫像のやうにちつと立つてゐる。夢見るやうにひつそりとした河の景色や、人眞似鳥の輪を描く様や馬の姿が睡氣を催させる。一時間たち、二時間たつても、セリヨージカはまだ歸つて來ない。河の面を綺麗に掃き、腰掛けの箱も運んでおいたのに、酔泥れは姿を見せない。マトウエイは待ちくたびれて欠呻を繰り返すばかりである。退屈といふほどの気分は、彼の知らない気分の一つである。もし彼が、一日でも、一と月でも、或は一年でも河に立つてゐると言はれたら、いつ迄でも立つてゐるにちがひない。

たうとうセリヨージカは百姓家の後方から姿を現はした。よろよろした足取りで、やつと動い

てゐる。彼は遠く廻り路するのを怠けて、近路をしようと道でないとところを突つきりながら、河土堤へと眞直ぐに下りて來る。そして雪に足を突つこんだり、叢に引つけられたり、仰向けに滑りころんだりする——それが、のろ臭として、時々立停る。

「何してゐるんだ？ お前、」と彼はたちまちマトウエイをやり籠める。「何だつて無駄に突つ立てるんだ！ いつになつたら氷を割るつもりだい？」

マトウエイは胸の上に十字を切つた後で、両手に鐵槌を取りあげ、描かれた圓を注意深く測りながら、氷を割りはじめた。セリヨージカは箱に腰かけて、彼の助手の不器用な拙劣な作業に眼を据ゑる。

「端のところをもつとそうつと！ そこは靜かにやるんだ！」と彼は命令する。「うまく出來ねえなら手を着けねえがいよ。やり始めたからにや、仕上げなければいけねえ、いゝか！」

土堤の頂邊に群衆が集まつて來る。見物人の姿を見ると、セリヨージカは一さう勢ひ立つ。

「斷つておくが俺は氷割はやらねえよ……」と彼は臭い巻煙草に火をつけて、地面に唾を吐きながら言ふ。「俺の手をかけずに、うまく出來るかどうだか見て、やりてえ。去年コスチューコウオの村ちや、スチョーブカ・グリコフが俺のやる通りにヨルダン祭場を拵へようとか、つた。

ところが、やつて見ると、どうだい——お笑草わらわらになつただけの話よ！ ヨスチューコウオ村の奴ら、こつちへやつて来やがつた——わいわいと塊かたまりまつて来たもんだ！ 方々の村から集まつてよー！」

「この村の他にや、立派なヨルダンを作ることあ出来ねえからな……」

「饒舌ひやうぜつる暇ひまにさつさとやんな……爺さん……縣内どこを捜さがしたつて、こゝのやうなヨルダンは看みつかりやしねえ。兵隊だつて言つてらあ、町へ行つても、こゝほど立派なヨルダンは見られねえつて。もつと、そうつと、そうつと！」

マトウエイは溜息をついたり、唸うなつたりする。仕事は容易でない。氷は堅くて厚い。割つた氷は、そこの邪魔にならないやうに、すぐに何處かへ運び捨てなければならぬ。」

が、作業が難かしく、セリヨージカの命令が意地悪いぢあくいに拘こらず、三時頃には、ヴィストリヤンカ河に、黒つばい大きな水の環状線が出来た。

「去年の方がよかつた、」とセリヨージカはぶつくさ言ふ。「お前は、それもやれねえのかい？ ええ、間拔まぬけめ！ 神様のお堂守みやまもりに、よくもお前のやうな朴念ぼくねんじん人を雇よつておいたもんだ！ 杭くいを作る板をとりに行つて来い！ 環わ型がたを持つて来い、鴉カラス爺ぢや！ それから序ついでに、どこかで麵めん麩ぼと……胡こ

瓜うりか何かとつて来い。」

マトウエイは出かけて行つたが、少時の後で、今まで毎年いろいろな色彩の模様を塗つて使つた巨きな木造りの環型を肩に擔つて、歸つて来た。環の真中には、赤く塗つた十字架があつて、杭を差し込む穴がその周りを取りまいてゐる。セリヨージカは、環型をうけ取ると、氷にあけた穴の上に重ねる。

「うめえ……きつちり合つてら……これで色さへ塗り換へりや上等だ……やい、何だつてまた突つ立つてるんだ？ 讀經臺よみぎんたいを拵しらえにかゝれ。でなきや、十字架立てる丸太をとつて来い……」

朝からまだ、何にも食はず飲まずにゐたマトウエイは、又もや、重い足付で丘の方へ登つてゆく。セリヨージカは怠おぼけながらも、杭は彼自身の手で作る。これらの杭が、奇蹟のやうな效力を現はすものであることを彼は知つてゐる。聖水式の後で、この杭を保監する役に當つたものは、その一年中幸福だと言はれてゐる。かういふ仕事こそ骨を折る値打ちがある。

とは言へ、本當に大切な仕事は明日から始まるのである。その時から、セリヨージカは、愚鈍おろちんなマトウエイの前に、彼の才能の偉大さを餘すところなく現すのである。さうなると、彼の饒舌ひやうぜつ、缺點けつてん探し、移り氣、好奇心には限りがない。マトウエイが十字架を建てるために、二本の大丸太

を釘づけしやうとすれば、彼にはそれが氣にいらす、始めからやり直せといふ。マトウエイが呆然立つてゐやうものなら、セリョージカは腹を立つて、何故行かないのだと怒りつける。マトウエイが行かうとすると、何處へゆくんだ、仕事をしろと怒鳴り出す。彼には自分の道具類が氣にいらぬ。天氣も氣にいらなければ、彼自身の才能も氣に入らぬ。何から何までが不満足になつて来る。

マトウエイは讀經臺を据ゑるために、大きな氷の塊を挽き割る。

「何だつて角を毀したんだ？」とセリョージカは叫びながら、猛烈に彼を睨みつける。「何だつて角を毀した？ と訊いてるんだ。」

「キリスト様のために、勘辨してくれや。」

「もう一度新しくやれ！」

マトウエイは再び挽き割る……そして彼の苦痛には際限がない。讀經臺は、彩色した環型をのせた氷の穴の傍に立てられることになつてゐる。その讀經臺の上には、十字架と開いた福音書の形を彫りつけることになつてゐる。が、それでお終ひなのではない。讀經臺の後方には、群衆全部の眼につくやうに、ダイヤモンドやルビーを鑲めたかのやうに日光にきらきらと輝く、高い十

字架を立てなければならぬ。十字架の頂上には、氷で彫刻した一羽の鳩をのせる。教會からヨルダンへの通路には、樅と杜松の小枝を撒きちらしておかなければならぬ。これらのすべてが彼等の仕事なのである。

セリョージカは、まづ最初に、讀經臺を据ゑにかゝる。彼は鑿と鑿と錐とで作業をする。讀經臺の上の十字架と、福音書と、讀經臺から垂れ下げる打敷とは見事に出来あがる。次には鳩を彫りはじめぬ。セリョージカが、鳩の顔に溫和と謙遜との表情を現はさうと懸命になつてゐる間に、マトウエイは、熊のやうにうろつき廻りながら、木材で造つた十字架に氷を掩はせる操作をする。彼は十字架を運んでいつて、氷穴へ押し浸す。水が十字架に凍りつくのを待つて、もう一度よく水に漬る。かうして十字架全躰が氷の厚い覆をつけてしまふまで、何度でも繰りかへす……この仕事は十分の力と根氣とを必要とする困難な作業である。

それでも、この繊細な仕事は成功した。セリョージカは、まるで憑物でもしたやうに村中を駆けまはる。彼は、これから直ぐ河へ行つて、あの飾物を残らず打毀すつもりだと斷言したり囁いたりする。彼はかうして好ましい塗料を投じだすのである。

彼の衣囊は、紺青、鉛丹、緑青などの泥畫料で一ぱいになつてゐる。彼は一錢も拂はずに、

一つの店から他の店へと我無沙羅わがむじらに集めて歩く。店を出ると、すぐ近くの居酒屋へ。彼はそこで一杯飲み、やつぱり金は拂はずに、大手を振つて飛び出す。或る百姓家で、彼は紅甜菜ベートルビの葉をもらひ、他の百姓家では玉葱の皮を手に入れる。それを材料にして黄色い繪の具を作るのである。彼は誓つたり、突つかゝつたり、嚇かしたりする……が、誰も苦情を言ふものはない！ みんなは彼に笑顔を見せて、彼に同情して、セルゲイ・ニキーチツチと尊稱で彼を呼ぶ。彼の技術は個人のものではなく、彼等のものであり、全民衆のものであると感じてゐるのである。或る一人が創造すれば、他の者はそれを援けなければならない。セリヨージカは、個人としては、取るに足りない怠け者で、酔泥れで、無頼漢わづらひである。が、羅針機コンパスを使ひ、鉛丹鉛丹を使ふと、たちまち彼は、或る高級な人間となり、神の下僕となるのである。

洗禮祭の朝が来る。教會の管内と河の兩岸は、遠くの方まで群衆に埋められる。ヨルダン祭場を設けた凡てのものは、新しい筵ひしやの下に丁寧に隠してある。セリヨージカは興奮を抑へながら、筵の近くを靜かに歩きまはる。彼は數千の群衆を見わたしてゐる。そこには他の教區からも多數の禮拜者が集まつてゐる。それらの人々は、たゞ彼の有名なヨルダン祭場を見たいために、寒氣と雪を侵して、幾露里かの遠路を徒歩でやつて來たのである。マトウエイは、辛い荒仕事を終つ

てから、すでに教會に歸つてゐて、そこには姿を見せず、聲も聞えない。彼のことは早くも忘れられてゐる……天氣は素晴らしい……大空には一片の雲も見えない。太陽は眩しく輝いてゐる。

禮拜をつげる鐘かねの音が、丘の上に響きわたる……數千の頭が帽子をぬぎ、數千の手が動く。數千の群衆の切る十字の符しるし！

セリヨージカは、待ちきれぬ興奮を、どうして抑へていゝのかわからない。が、聖餐式の鐘かねは、すでに鳴つてゐる。やがて半時間ばかり経つと、鐘樓に、群衆の間に、一種の騒さわめきがありありと見られる。會堂からは、幾本かの旗が次々に出て來る。澤山の鐘かねの音が慌しく響き交はす。セリヨージカは、興奮に顫へながら、筵を引きのける……そして人々は一種驚嘆すべきものを看出すのである。讀經臺、木造の環型、杭、氷に掩はれた十字架、それらが幾色ともない虹のやうな光彩を八方へ撒きちらす。十字架と鳩とは、眼頭が痛くなるほど、眩しい光を放つてゐる。おゝ、神の恵み給ふ美しさ！ 驚嘆と歡喜の動搖ゆがみめきが群衆の中を傳はつてゆく。鐘かねの響は一際高くなり、日光はますます輝く。旗は浪の上を渡るかのやうに群衆の頭上をはためき過ぎる。聖像の裝飾と僧徒の祭服とに彩られた行列は、そろそろと道路を下つて、ヨルダン祭場へと向つてゆく。鐘かねを止めるやうに鐘樓へ合圖の手が振られる。そして聖水式がはじまる。僧徒たちは、祭典も、

民衆一齊に捧げる御祈禱も、同時に長びかせやうと努めながら、ゆつくりと靜肅に式典をすゝめる。あたりは森と靜かになる。

しかし、やがて僧徒たちは、十字架を水中に浸す。空氣は異常な物音を反響する。小銃の發射する音、急調子の鐘の響、歡喜にあふれる高い稱讚の聲、叫び、十字架へ近づかうとする群衆の動搖めき。セリョージカはこの騒音にちつと耳傾けながら、彼に向けられてゐる數千の眼を見る。そして怠惰者の魂も、光榮と勝利の情感に充たされる。

復活祭前夜

私はゴルトワ河の土堤に立つて、向側からの渡船を持つてゐた。他の季節ならば、ゴルトワ河は、芦の茂つた蔭に穩かな水面のちらちらする、流れの音も靜かな、幅中ぐらゐの平凡な河であつた。が、今私の前には、立派な湖水風景が繰りひろげられてゐた。春の雪解の洪水がどうどうと急流になり、兩岸に溢れ、遠い距離まで河の兩側に氾濫して、野菜畑や、牧草地や沼地を浸してゐた。その水の表面に突き出してゐるポプラや灌木の茂つた梢は、一種奇怪な様相を現はして、暗黒の中では、朦朧とした物淋びしい絶壁の列のやうにも見えた。

天氣は澄み透つてゐるやうに思はれた。眞暗ではあつたが、樹々や、水や、人影は見わけられた……視界は大空一めんに撒きちらされた星の銀砂子に輝いてゐた……私は、この晩ほど數限りない星を見たことはなかつた。文字通りその間に指を挿む空隙もないほどであつた。或るものは鷺鳥の卵のやうに大きく、或るものは麻の實のやうに小さかつた。禮拜行列のために現はれたそ

これらの星屑は、大きいのも小さいのも一つ一つが淨らかに、鮮かに、又樂しげに、いとも優しく輝いてゐた。大空は水に映り、星の砂子は深い暗黒に浸つて、光の渦巻を顛はせたり戦かしたりしてゐた。空気が温くひっそりとしてゐた……塗りこめたやうな暗黒に横はつてゐる對岸の土堤の遙か遠くには、幾つかの明るい赤い燈火が輝いてゐた。

私から二三歩離れたところに、高い帽子をかぶつて、手に瘤だらけの杖をもつた、百姓らしい人影を私は見た。

「かう何時までも渡船の來ないのは、どうしたこつてせう？」と私は言つた。

「いつもなら、夙に來てゐる時刻ですが、」と人影は答へた。

「あんたも渡船を待つてゐるんですか？」

「いゝえ、渡船を待つてゐるんぢやねえんで、」と百姓は欠伸をした。「私や裝飾燈を待つてゐるんですが。私も渡船にのりてえが、實は渡船の五カベツクを持つてねえもんだから。」

「ぢやあ、あんたに五カベツク貸してあげませうか？」

「いゝえ、結構ですよ……その五カベツクでもつて、私のために、あすこのお寺で御燈明をあげて下せえ……その方がよつほど御利益があります。私はこゝに立つてゐやす……まるで沈んじや

つたやうに渡船が來ねえが、どうしたのかな！」

百姓は水際へ行つて、渡綱を手にとりながら叫んだ。「イエローニム！ イエローニム！」

その叫び聲に答へるかのやうに、大きな鐘の音が、對岸から、もの軟かに河面を渡つて來た。低音二重奏のやうに深い低い響であつた。それは暗黒その物が嘎れ聲で歌ひ出したかのやうに思はれた。と、突然、どんと一つ大砲を打つた音がした。その音は暗黒の中に轟きわたつて、私の後方遙か遠く消えていつた。百姓は帽子をぬいで、胸の上に十字を切つた。

「キリストは甦へり給へり、」と彼は言つた。

空の彼方へ、最初の鐘の餘韻が終る前に、第二の鐘が鳴り出し、つゞいて第三の鐘が鳴つた。暗黒は絶え間のない旋律的な響に充たされた。赤い燈火の近くに、新しい、幾つかの燈火が見えて、みんな一緒に動き出し、絶えずちらちらと揺れはじめた。

「イエローニム！」と私は引伸ばしたやうな口籠つた聲を聞いた。

「ありや向う岸で呼んでるんですが、」と百姓は言つた。「あつちにも渡船がゐないと見える。イエローニムは疑に歸つたのかな。」

いくつもの燈火の光、そして軟かな鐘の奏音は一つ一つ響き交はした……私はもう待ちきれな

くなつて苛々してゐたが、暗黒の中をちつと見詰めて、たうとう絞刑臺のやうな形をした一つの輪廓を見つけた。それは長い間待つた渡船であつた。その輪廓はだんだんはつきりとして來たが、もし、さうでなかつたら、ちつと動かすにゐるか、或は向う岸へ移つてゆくかと思はれるほど、いかにも除々とこつちへ近づきつゝあつた。

「早く來ろ！ イエローニム！」と百姓は叫んだ。「紳士の方がお待ち兼だぞう！」

渡船は土堤に滑り寄つて、少し傾いたかと思ふと、ごとんと停つた。ヨサツク織の修道士服と光つた圓い無縁帽を身につけた、丈の高い一人の男が、手に渡綱を支へながら船に立てゐた。

「長い間待たされたが、どうしたんだ？」と私は船に跳びのりながら訊いた。

「キリスト様のためにお許し下さい、」とイエローニムは物靜かに答へた。「あなたお一人ですか？」

「あゝ、私一人つきりだ……」

イエローニムは両手に渡綱を手ぐつて、疑問符のやうな格好に身を屈めながら、はあはあと息喘いた。渡船はぎいつと軋んで、ごとりと揺れた。高い帽子をかぶつた百姓の影は、そろそろと私から後退さりしていつた——渡船が離れてゆくのであつた。イエローニムはすぐに身構へを直

して、片手で操りはじめた。私たちは滑り寄つてゆく土堤の方をちつと眺めながら黙り込んでゐた。そこには先程の百姓の待つてゐた裝飾燈が點つてゐた。水際のところでは、タール油の幾樽か幕營の大焚火のやうに燃え輝いた。昇つたばかりの月のやうに眞紅な反映は、長い幅廣い綺をなして私たちを迎へた。燃えあがつてゐる油槽は、その煙を赤く染め、火のまはりにうろついてゐる人影をはつきりと見せた。が、その後方遙かに遠く、軟かな鐘の餘韻の漂つてゐるあたりは、同じやうに靜かな暗黒がひろがつてゐた。突然、一つの狼煙が暗黒を切り割いて、大空へジグザグの火の細布を投げた。それは弧を描きながら、空に突きあたつて粉々に碎れたかのやうに、ばちばちと音をたてる火花を撒きちらした。土堤のあたりからは、遠くで萬歳を聞くやうな騒がしい人聲が聞えて來た。

「實に美しいね！」と私は言つた。

「美しいとも何とも言ひやうのないほどです、」とイエローニムは讚嘆した。「今夜の美しさは特別です。ほかの時なら、花火だつて大して人を惹きつけはしませんが、今夜はみんなを有頂天にしでします。且那は何處からいらしたんですか？」

私は何處から來たかを話した。

「實際……けふはお芽出たい日です……」とイエローニムは癒りかけの患者のやうな鼻にかゝる弱い中次音で続けた。「空も大地も、大地の下にあるものも、みんな楽しんでゐるのです。生きとし生けるものが、この祭日を祝福してゐるのです。けれども、こゝに一つ、あなた様にうかゞひたう？」

この思ひがけない質問は、退屈してゐる僧徒が好んでする、宗教上の涯のない會話に私を惹き入れるためではないかと私は妙な想像を起した。私はあまり饒舌りたくない氣持ちだったので、たゞ單純に訊いた。

「あなたの言ふのは、どんな悲みですか？」

「大たいとしては、人々共通のことなんです。けふ特に悲むべきことが、お寺で起つたのです。彌撒の時、聖書を読んでゐる間に、修道士で補祭の役をしてゐたニコライといふ男が亡くなつたのです。」

「神様の思召ですね、」と私も修道士風の調子に落ちながら言つた。「我々は誰でも死を逃れることは出来ないのです。私に言はせれば、その人は實に歎ぶべきです……もし復活祭に誰かゝ死ねば、その人は眞直ぐに天國へ行くと言はれてゐる。」

「さうです、それは本當です。」
私たちは黙り込んでしまつた。高帽子の百姓の影は、土堤の輪廓にまぎれていつた。タール油の篝火は一さう燃えさかつてゐた。

「聖書には、悲しみの儂さはつきりと指摘して、反省せよと教へてあります、」とイエローニムは沈黙をやぶつた。「ですが、悲みに心が奪はれて、條理を聴くまいとするのは何故でせう？ 惱ましさ泣きたくなるのは何故でせう？」

イエローニムは肩をしゃくり上げて、私を振り向きながら言つた。「もし私が死んだのならば、或は誰か他の者が死んだのならば、恐らく何の注意も拂ふ値打ちはないでせうが、死んだのはニコライなんですから！ 他の者ではなく、ニコライなんですから悲しいのです！ 實際、あの人が、もうこの世にゐないとは、どうしても考へられません。かうして渡船の上に立つてゐると、今にもあの人が、大きな聲で私を呼ぶやうな氣がしてならないのです。あの人はいつも土堤へ出て来て、渡船の上では物に驚いたりしないやうにと私に注意してくれました。あの人は、そのためになんぞ眞夜中に寢床を出て来てくれました。親切な心の所有者でした。おゝ、どんな

に親切な、優しい人だつてせう！ 大ていの母親でも、ニコライが私にして呉れたやうに親切には出来ないでせう。神よ、あの人の靈を守り給へ！」

イエローニムは渡綱を手にとつたが、すぐに又私を振り向いた。「實に氣高い教智！」と彼は頗へ聲で言つた。「實に調子の高い明朗な言葉！ ちやうど今朝の禮拜に、もうやがて歌はれるあの讚美歌『おん身の聲のいかに優しきかな、いかに快きかな！』といふあれです。それにあの人は、尙一つ、すぐれた才能に加へて、特異な天分を持つてゐました。」

「どんな天分を？」と私は訊いた。

修道士は穿鑿するやうに私を見詰めて、自分の秘事を打明けるに足りると信じたらしく、彼は機嫌のいゝ笑みをもらした。

「ニコライは讚美歌を作る優れた才能を持つてゐたのです、」と彼は言つた。「それは驚異に値するものでした。さうです、驚異といふ他はありません。お話すれば、多分あなたも喫驚なさるでせう！ 神父アルヒマンドリツトはモスクワから來た人ですし、副神父はカザンの學術研究所出身です。私たちは又、聰明な僧侶と長老とを持つてゐます。けれども、お分りでせうが、讚美歌は誰にも書けるといふ譯にはゆきません。ところが、單純な修道士でしかないニコライは、どこで

學問をして來たといふ譯ではなく、又、そんな容子もありませんでしたが、讚美歌だけは作れませんでした。實に驚くべき才能ですね！ 驚くべき！」

イエローニムは手を握り合はせ、船の渡綱のことはすつかり忘れて、熱心につゞけた。

「副神父は説教の原稿を書くのに難かしくて弱つてゐました。いつでしたか、修道院史を書いたことがあります、その間、修道士たちを退屈させたり、町へ十二度も使者を出したりしましたが、ニコライは、そんな暇に小さい頌歌をいくつも作りました！ 頌歌を！ 歴史や説教とは全然趣の異つたものを作るのは、大したことです！」

「讚美歌を作るのは難しいのですか？」と私は訊いた。

「非常に難しいことです……」とイエローニムは頭を頸づかせた。「天分を授かつてゐなければ、智識や位階だけで出来る仕事ではありません。それを理解しない修道士たちは、讚美歌の主題となつてゐる聖徒の生活を知る必要があるだけだと論じてゐます。その讚美歌と他の讚美歌とを調和させさへすればいいのだと論じてゐますが、それは過つた議論です。もちろん頌歌を書くには、聖徒の生活を完全に知るばかりでなく、その日常の些事まで知る必要があります。新しい頌歌を昔の頌歌に調和させて、何處から始めたらいゝか、どんな風に書いたらいゝかを知らなければな

りません。例へば、最初の合唱は、どれも『選ばれしもの』とか『名ざされしもの』とかいふ言葉ではじまつてゐます……最初の行は、いつも『天使』といふ言葉ではじめられるのです。あなたはかういふ問題に興味をお持ちかどうか知りませんが、『こよなく佳美きイエス』といふ小さい頌歌では、こんな風にはじまつてゐます。『創造者なる天使よ、全智全能の神よ！』それから聖母を讃へる歌では『御空より降りませし最初の天使は』といふのです。さまよへる勞役者ニコライに捧ぐる歌では、『眞は男なれども、假に天使の姿となり』と言つてあります。まあ、凡てこんな風です。どれも『天使』ではじまるのです。もちろん、昔の頌歌に調和させなければ歌へないことは分つてゐますが、使徒の生活や、他の行事などとの適合といふやうなことは問題ぢやありません。問題はその美といふことです。韻律の佳さといふことです。どの歌も短章で、よくまとまつてゐて、調子よく合唱出来なければなりません。一行一行に氣品があつて、雅びやかで、優しくなければなりません。一言でも、下品だつたり、荒々しかつたり、不愉快な言葉がまじつたりしてはいけません。禮拜するものがしみじみと感じ入つて、心中深く歎びに打たれながら、涙ぐましくなるやうに書かれてゐなければなりません。聖母へ捧げる頌歌には『嬉しきかな、人間の思ひも及ばぬ尙高き御身！ 嬉しきかな、天使の眼にも見透し難き深遠なる御身！』とあり

ます。同じ頌歌の他の一節には、かういふ句があります。『嬉しきかな、おゝ、眞理の糧なる微妙き光明の果實を熟らせの樹々よ！ 嬉しきかな、おゝ、美しき蔭をひろげ、その下に休ひ寄る人々を慰むる樹々よ！』

イエローニムは何かに脅かされたかのやうに、或は恥かしさを隠さうとするかのやうに、両手で顔を隠した。そして頭を振つた。

『微妙き光明の果實を熟らせる樹々……美しき蔭をひろげる樹々……』と彼は呟いた。「人間が斯ういふ言葉を看つけ出すとは！ これこそ神から授かつた天分の力です！ 簡決のために、ニコライは一行の中に豊富な思想を含ませてゐます。而も、いかにも流暢に、完全に表現されてゐます。『焰光あたりに迷はる火把の明り……』といふ句が『こよなく佳美きイエス』の頌歌にあります。『焰光あたりに迷はる……』こんな美しい言葉は、會話はもちろん、書物にも滅多に見られはしません。ニコライの歌には、かういふのが幾らも出て來るのです。彼は胸の裡にそれを探し出し、それを創作したのです。一行一句、それぞれ美しさを持つてゐなければなりません。そこには花や、光や、風や、太陽や、現象世界のあらゆる物がなければならず、耳さはりがよく、解きやすく、あらゆる感嘆詞を置かなければなりません。『嬉しきかな、天の育てし花よ！』とい

ふ何が『さまよへる勞役者ニコライ』の頌歌にあります。單に『天なる花』ではなく『天の育てし花!』と言つてあるのです。それで一さう滑らかに、一さう快く耳に響くのです。ちやうど使徒ニコライその人が書いたやうに……まつたく、そんな感じではありませんか! 而も彼がどんなに始終書いてゐたかは、お話しし切れないほどです!

「そんなでしたら、亡くなつたのは残念でしたね。」と私は言つた。「それはさうと船を急いで下さい、でないと、遅れさうです。」

イエローニムは慌てゝ起きあがり、渡網のところへ駆け寄つた。向うでは、あるだけの鐘を鳴らしはじめた。多分、行列はもう修道院の近くを練り歩いてゐるにちがひない。タール油の篝火の後方の暗黒の中に、揺めく燈火の光が點々と見え出して來た。

「ニコライはその頌歌を出版しましたか?」と私は訊いた。

「出版など思ひもよらないこつてす、」と彼は嘆息した。「もし出版してゐたら、妙なことになつてゐたでせう。出版する目的なんぞありやしませんでした。修道院では、誰一人その讚美歌に興味を寄せるものはないのですから。誰もみんな、その頌歌を好みませんでした。みんなはニコライが書いたことを知つてゐましたが、氣のつかない風をして、黙殺してゐました。誰も、今新しく

作られた歌を稱讚するものはないのです。」

「ぢやあ、みんなは彼に對して偏見を抱いてゐたんですね?」

「まさしく、さうです。ニコライがもし長老でしたら、修道兄弟たちも興味を寄せたこととせうが、彼はまだ四十歳にもなつてゐなかつたのです。ですから、みんなはたゞ嘲笑つたばかりか、彼の作を罪惡だと思つてゐるものさへありました。」

「ぢやあ、何のために作つてゐたんです?」

「主として自分の慰安のためでした。修道兄弟の中で、彼の讚美歌を讀んだのは私一人だけでした。私は人に知られないやうに、こつそり彼の處へいつたものです。彼は私がそれに興味をもつてゐるのを非常に喜んでゐました。彼は私を抱擁したり、私の頭を撫でたり、小さい子供を可愛がるやうに、愛情をこめて私に話しました。彼はいつも部屋の扉をびつたりと閉めて、彼の傍に私を坐らして讀みはじめるのでした……」

イエローニムは渡網を手放して、私の傍へ來た。

「私たちは親友でした、」と彼はきらきらする眼で私を眺めながら囁いた。「彼の行く處なら私は何處へでも行きました。私が見えないと、彼は疲びしがつてゐました。彼は誰よりも私を愛してゐ

ました。それといふのも、私が彼の頌歌を讃嘆してゐたからです。それを思ひ出すと、私は悲しくなります。私は今、弧兒か寡夫にでもなつたやうな氣持ちです。われわれの修道院の人たちは、みんな善良な、親切な、信心深い人たちです……けれども、優情をもつた洗練された人が誰もゐないのです。みんな百姓同様です。大聲で話したり、歩く時にどたどた足音を立てたり、咳拂ひをしたり、がやがやと騒がしいこつてす。が、ニコライはいつも謹み深く、物を言ふにも靜かに言ひました。人が眠つてゐたり、お祈禱をあげてゐたりするのに氣がつくと、その傍をそつとすり抜けてゆくといつた具合でした。彼の顔は優情のこもつた濃厚な表情を浮べてゐました……」

イエローニムは溜息をつきながら、再び渡網をとつた。私たちはもう土堤に近づいてゐた。暗黒と河の靜寂を突きぬけて、息づまるやうな煙や、ばちばち燃える篝火や、騒がしい人聲の圓内へはひつた。もはやタール油の樽をとりまいてゐる群衆を、はつきりと見ることが出来た。燈火の揺めく光は、その姿や赤い顔色に一種異様な、幻影に近いやうな印象を與へた。時から時まで、その頭や顔の間に、料理釜に投げ込まれたやうに靜止してゐる馬の頭がちらちらと見えた。

「もう直に復活祭の讚美歌がはじまります……」とイエローニムは言つた。「ニコライがゐないから、誰も眞からその歌を感嘆するものがありません……復活祭の讚美歌ほど彼を敬ばした作は他

にありません。彼は歌詞の一句一句に恍惚となつてゐました。あなたはあそこへ行らしつて、その歌をお聞きになつて御覽なさい、きつと感動なさるにちがひありません。」

「では、あなたは會堂へ行かないのですか？」

「私は行けないのです……渡船の仕事をしてゐなければなりませんから……」

「誰かあなたと交代するものはないんですか？」

「さあどうなりますか……八時には交代することになつてゐますが……御覽のやうに誰も來ないのです！ 會堂へ行きたくつても、我慢してゐなければなりません……」

「あなたは修道士ですか？」

「さうです、私は平僧（僧籍にはいつてゐない修道士）です。」

渡船は土堤に滑り寄つて停つた。私はイエローニムの手に渡賃の五カベツクを差し出して、土堤へあがつた。一人の子供と女とが乗つて居眠りしてゐた一臺の馬車が、すぐに軋り出して渡船場へ近づいて來た。火光を浴びて、ほのかに赤く染まつたイエローニムの姿が、渡網へ屈んだと見ると、やがて又渡網を操りはじめた……

私は泥濘路をひろつていつたが、幾らも行かない中に、新しく担ねかへられた小徑へ出た。この

小徑は修道院の門につゞく通路であつた。門は濛々と漂ふ煙の雲に捲かれた、異様な群衆や、鞍を置いてない馬や、荷馬車や、輕馬車の間に、洞窟のやうな光景を呈してゐた。群衆の騒がしい足音、馬の嘶、笑聲、そして眞赤な火光と煙に捲れる人影や物影がいつしよになつて閃めいた……まつたくの混亂であつた！ それでも、この雜鬧の中に、人々は少しばかりの餘地を看つけて、小さな一つの大砲に彈丸ごめしたり、祝福菓子を買つたりしてゐた。修道院の境内へはいると、外面とちがつて、塀の兩側には、少しの騒ぎも見られなかつた。その上、一さうの作法と秩序とが保たれてゐた。そこ此處に、抹香と乳香の香氣がした。人々は聲高に話してゐたが、笑聲や馬の嘶はなかつた。墳墓や十字架の傍では、復活祭菓子をもつた人々が、押し合つたり、割りこんだりしてゐた。人々の多くは、遠い村からやつて来て、そのお菓子に祝福をうけようと待ち構へてゐるらしかつた。年若い俗人の修道士は、長靴の拍車を鳴らしながら、修道院の門から會堂の扉口への通路に敷いた鐵の踏板の間を忙がしく駆け歩いてゐた。鐘樓の上でも、修道士たちは忙がしく動いたり叫んだりしてゐた。

「何たる賑かな晩だらう！」と私は思つた。「素晴らしい！」

更けわたる暗黒、鐵の踏板、墓地の十字架、樹蔭に人々の動きまはつてゐる樹々、それらすべて

ての自然の中にも同じやうな賑かさと活氣だつた氛圍氣とが漲つてゐて、人々を魅惑した。が、その賑かさも、昂奮も、會堂の中では、外側と比べものにならぬほど高潮に達してゐた。扉口のところは、吸ひこまれる人の流れと溢れ出る人の流れとが絶えず押し合つてゐた。出るもの、入るもの二筋となつて、ちよつとの間立停つてゐるかと思ふと、再び動き出すのであつた。人々は捜しものでもしてゐるやうに、場所から場所へと急いでゐた。扉口を溢れた人々の流れは、堂内一帯にひろがつて、一ばん前列さへ掻き亂した。その前列には、地位の高い、嚴めしい幾人か立つてゐた。そこでは御祈禱を集中させることは出来なかつた。全然御祈禱はあげられなかつたが、その代りに、絶えず動揺してゐる間にも、押し合ひへし合ひする他愛のない衝動の中にも、何か歡びを爆發させる機會を待つてゐる一種子供らしい、その場限りの楽しい昂奮があつた。これと同じやうに奇妙な動揺は、復活祭執行の時に、驚かれるほど昂まつていつた。祭壇の扉は残らず開かれ、濛々とした乳香の煙は、枝附燭臺のまはりの空氣にさまよひ、どつちを振り向いても、燈明と蠟燭の光と、とぼとぼ燃える音があつた……動經はなく、和やかな輕い調子の讚美歌が、しつ切りなしに歌はれてゐた。一章終るたびに、神父は法服を着換へて、乳香を焚きに出て來た。それは十分ごとに繰り返かへされるのであつた。

私は一つの席をとつたが、たちまち、前方から動いて来た人波に後方へ押しもどされた。丈の高い、體格のがつしりとした助祭が、長い紅色の蠟燭をさげ、私の前に進んで来た。その後から、黄金色の法冠を頂いた、灰色の頭髮をした神父は、香爐を振りながらつゝいた。その姿が見えなくなると、群衆はまた、以前のところまで私を押し出した。が、十分も経たない中に、新しい人波は私に崩れかゝり、再び助祭が姿を現はした。今度はその後副神父を導いてゐた。副神父は、イエローニムが修道院史を書いたと話したその人であつた。

私は群衆にまじつて、人々と同じ歡喜の昂奮に感染した時、イエローニムのために言ひ難い悲哀に打たれた。何故、誰かを交代にやらないのか？『汝の眼をあげよ、おゝ、シオンよ、周りを眺めよ！』と唱歌隊は歌つた。『何となれば汝の子供たちは、北より南より、また西より東より、聖なる光をめぐる焰のごとく、汝の許に集まるが故に……』

私は人々の顔を眺めた。人々は生々とした、勝ちほこつたやうな表情を浮べてゐた。が、誰も、その歌に恍惚となつてゐるものはなかつた。ちつと息をひそめて、感じ入つてゐるものもなかつた。私は、あのイエローニムが、どこかの壁際に立つて、その聖歌をちつと聴いてゐるやうな氣がしてならなかつた。私の傍に立つてゐる人々の耳には、たゞ風のやうに掠め去るこれらの聖歌

を、彼イエローニムは、彼の繊細な鋭敏な魂のうちに、貧るやうに飲みこむであらう。ちつと息をひそめて、恍惚の歌びに涙ぐむであらう。そしてこの祭典を、彼以上に喜ぶものはないであらう。然るに彼は今、暗黒の河の上で、亡くなつた友、修道士兄弟のことを悲みながら働いてゐる。人波は後方へどよめき退つた。珠數を下げた、體の大きな修道士が、鏝廣の帽子と天鷲絨の上着をつけた一人の淑女を案内しながら、私の傍を通りぬけて、ちろちろあたりを見まはした。その後から、頭の上に椅子をさげた寺僕が、急いではいつて来た。

私は會堂を出た。私は、知られざる讚美歌の作者ニユライの屍體を見たいと思つたのであつた。私は小さい僧房の並んでゐる壁際を歩いて、その窓を一つ一つ覗いて見たが、何にも見當らなかつたので、再び引きかへした。私はニユライを看出さなかつたことを口惜まなかつた。神は知り給ふ。もし彼を看出したならば、今彼に對して描いてゐる幻想的な畫を私は失ふであらう。私は誰にも理解されなかつたその人、夜、イエローニムを見に河土堤へ出たり、花や星や日光をもつて彼の頌歌を充たしたりしたその人、優しい、温順な、憂鬱な風貌をもつた、蒼白い、氣の弱い男であつたにちがひないその人、誰にも理解されなかつた孤獨なその人の詩的な影像を胸に描いてゐた。彼の眼は叡智に輝いてゐたばかりでなく、心からの物憂しさと、その頌歌を引用し

た時のイエローニムの聲音と同じやうな子供らしい抑へきれない情熱に輝いてゐたにちがひな
し。

彌撒が終つて、私たちが會堂を出た時は、もはや夜中ではなかつた。夜はいつか明けかゝつて
ゐた。星の光は薄れ、大空はほのかに蒼ざめた色を見せてゐた。鐵の踏板や、墓石や、樹々の芽
はしつとりと露にぬれてゐた。空氣は沁み透るほど新鮮であつた。境界の外側では、夜の間に見
たやうな活氣だつた光景は、もはや見られなかつた。幾頭もの馬や人々は疲れきつて、いかに
眠さうな容子で、のろくさと動いてゐるだけであつた。タール油の篝火は消えて、黒い灰のほか
何にも残つてゐなかつた。誰もが疲れきつて、眠氣にぐつたりとしてゐる今、自然もまた、同じ
状態にあるやうに見えた。樹々も若い青草も、今眠つてゐるやうに思はれた。鐘の合奏さへ、夜
の間のやうに音高く楽しいものには思へなかつた。騒亂は終り、昂奮はしづまつて、快い疲労と
眠氣と溫暖とのほかには、もはや何にもなかつた。

今私は、河の兩岸をはつきりと見る事が出来た。水の上には薄い霧の塊が翻へるやうに漂ひ
移つてゐた。鋭い寒風は水を渡つて來た。私が渡船に跳びのつた時には、すでに一臺の輕馬車と
二十人ばかりの男女とが乗つてゐた。漠然と私が想像してゐたやうに、廣々とした河を横切つて

遠くのびてゐる濡れた渡網は、その先の方が霧の中に隠れてゐた。

「復活祭お芽出たう！ もう他にどなたもゐませんか？」と軟かな聲が訊いた。

私はイエローニムの聲に氣がついた。もう暗くはなかつたので、彼の修道服姿をはつきりと見
ることが出来た。彼は年ごろ三十五六の、丈の高い、肩幅の狭い、體付の圓々とした男で、俯眼
がちな、氣力のない眼と、刈込みのしてない楔形の髻とをもつてゐた。彼は異常な悲哀と疲労と
に悩まされてゐるらしかつた。

「あんたは、まだ交代しなかつたんですね？」と私は驚いて言つた。

「交代？」と彼は濕つた子供らしい顔を私の方へ振りむけて、微笑を浮かべながら言つた。「たうと
う朝まで誰も交代に來てくれませんでした。みんなは今朝すぐに始まる神父の精進齋に行つたの
でせう。」

よく蜂蜜を賣る時に使ふ小さい木桶にも似た赤い毛皮の帽子をかぶつた、小柄な百姓の手を借
りて、イエローニムは重い渡網を持ちあげた。彼等は同時に、はあはあと息を切らした。渡船は
滑り出した。

私たちは立ち昇る狭霧をかきわけながら河を横切つた。みんなは黙りこんでゐた。イエローニ

ムは機械的に片手で操つていつた。彼はその程かな、氣力のない眼を靜かに私たちに移した。と、やがて彼の眼は、濃い眉毛をもつた、顔色の仄紅い、商人の妻らしい容子の、若い女をぢつと見詰めた。その女は掠めてゆく霧に身をすくめながら、私の傍に立つてゐた。彼は途中すつと、彼女の顔から眼を離さなかつた。

彼の氣長な凝視には、男性的な氣配は少しも見えなかつた。イエローニムは彼女の顔に、あの亡友の優しい親切な面影を看出してゐたのであらう。

コサツク人

南露西亞の百姓マキシム・トリチャーフは、若い女房と一緒に、さつき教會でお祈禱の祝福をうけて來た「復活祭のお菓子」の包をもつて、馬車で歸る途中であつた。太陽はまだ昇らなかつたが、東の空には赤い光と黄金色とがまじり合つて、曉方いつも大空の紺碧をばかしてゐる狭霧をかき消していつた。あたりは森と靜かであつた……鳥どもも、やつと一聲二聲啼き出したばかりであつた……秋鶉の聲がすがすがしく響いて來た。そして小さな丘の遙か上の方に、一羽の鳶が、翼を重さうに煽りながら漂つてゐた。ひろびろとした平野には、他の生物は何にも見えなかつた。

トリチャーフは馬車を馭しながら、キリスト復活祭ほど幸福な氣分にしてくれる祭日はないと、楽しい想ひに耽つてゐた。彼は結婚してまだ幾月も経たずに、女房と初めての復活祭に行つたのであつた。彼の眼に映る何もかも、彼の想ひに浮ぶ何もかもが、輝かしく、楽しく、幸福に

思はれた。彼は農事にも想ひを走らした。耕作は具合よくゆくだらう。家の裝飾や調度類も、望み通りにいつて——みんな上等のものが——すっかり揃つたと思つた。彼はしげしげと妻を眺めてゐた。彼女は可愛らしく、優さしく、温和さうに見えた。彼は東の空の光輝や、若々しい草原や、二人乗馬車の轍の音や、鳶の輪に喜ばされてゐた。或る途上で、煙草の火をつけるために、ちよつと馬車を下りて、一軒の旅舎に寄つた時には、ついでに杯に一ぱい飲んで、一さう楽しい気分になつた。

「けふは『偉いなるこの日!』と呼ばれてゐるんだよ、」と彼は饒舌りだした。「まったく、偉いなる日だ! 御覽、リザヴェータ、いまに太陽が踊りながら昇つて来るよ。復活祭にはいつも、太陽が踊りながら昇つてくるんだ。やつぱり歡ぶんだね。」

「太陽は生きてはゐるのに、」と女房は言つた。

「けど、その中には人間が住んでゐるんだ、」とトリチャーコフは叫んだ。「本當に住んでゐるんだ! 遊星にはみんな——太陽にも月にも——人間が住んでゐるとイワン・ステパーノウキツチが話してゐた。本當だ……けど、あの學者は、ひよつとして嘘を言つたのかも知れないな。待てよ、太陽に住んでゐるのは、馬ぢやないかな、さうだ、馬だ!」

家路の半ほどにある『曲谷』と呼ばれるところで、トリチャーコフと女房とは、鞍を置いた

一頭の馬を見た。馬はちつと立つて、去年の枯草を喰つてゐた。道路の外側の小さい丘に、赤い頭髪をしたコサツク人が、身を折り重ねたやうに屈みこんで、自分の足を見詰めてゐた。

「キリスト復活祭お芽出たう!」とマキシムは彼に向つて叫んだ「ウラボー!」

「キリスト復活祭お芽出たう!」とコサツク人は頭をあげずに答へた。

「何處へゆくんだね?」

「休暇をもらつたので、家へ。」

「何だつて、そこへ坐りこんでゐるんだ?」

「気分が悪くなつちやつたんだ……歩けなくなつたんだ。」

「どんな風に悪いんだ?」

「體中が痛むんだ。」

「ふむ、そりや氣の毒な! みんな大祭を祝福してるのに、病氣になるなんて! けど、村にゆくか、旅舎に着くかして休んだ方がいゝぜ!」

コサツク人は頭をあげて、大きな、疲れきつた眼で、マキシム夫婦をちらちら眺めた。

「あなたは會堂からの歸りですかい？」と彼は訊いた。

「さうだよ。」

「わたしや途中でお祈禱の時間になつちまつた。神様は、家へ着くまで待つて下さらなかつた。馬で駆けつきたいと思つたんだが、どうにも力が出なかつた……あなた、信心深い教徒さん、精進日をはじめなのに、復活祭のお菓子を、一片でいゝから、この旅の者に頒けて下さらねえか？」

「復活祭のお菓子を？」とトリチャーコフは繰返して言つた。「そりや頒けられねえこともねえが……ちよつと待つて下さい、私は……」

マキシムはすぐに衣兜ボケツトに手を突つこんで、女房をちらちら見ながら言つた。

「小刀ナイフがないんで、切るのに困つたな。碎砕れちまふだらうから手で割りたくないし、どうしたらいゝかな！ お前、小刀をもつてないか？」

コサツク人は苦しげに呻うめ吟いんきながら起きあがつて、小刀をとりに馬の鞍のところへいつた。

「何と想つてるんです？」とトリチャーコフの女房は腹立たしげに言ひ出した。「復活祭のお菓子を切るなんて、いけませんよ。切つたお菓子を持つて歸つたら、私がみんなに何と思はれるか！」

齊日さいじつは村の百姓たちのところへ歸つてから始めなくつちやいけませんよ。」

女房はナブキン包みにした復活祭のお菓子を良人の手から取りあげてしまつた、そして言つた。「わたし、そんな事はさせませんわ。事をするにも程つてものがあります。これは肉片ぢやありません、復活祭のお菓子ですよ。ともかく、今切るのは、罪を犯すものですわ。」

「ぢやあ、コサツク人、怒つてくれるなよ、」とトリチャーコフは笑聲で言つた。「女房が承知しないからな。左様なら！ 機嫌よく行かつしやい！」

マキシムは鞭をふつて、びしりと馬を打つた。二人乗馬車は軋こりながら進んでいつた。家へ歸る前に復活祭のお菓子を切るのは、罪を犯すものだといふ事、それは道にはづれた事だと女房は尙もぶつぶつ言つてゐた。東の空には、羽毛のやうな雲の間を貫いて、日の出の最初の光が輝き出した。高空に雲雀の聲がした。いつの間にか、平野の上に輪を描いてゐた鳶は三羽になつて、遙か向うの別のところに浮んでゐた。青草の中で蟋蟀がすだき始めた。

「曲谷」から二露里ばかり來ると、トリチャーコフは後方を振りかへつて、ちつと遠くを眺めやつた。

「あのコサツク人はもう見えなくなつた、」と彼は言つた。「途中で病氣が出て倒れるなんて可哀相

な男だ。旅で難澁するほど悲しいことはあるまい……あのまゝ道傍で死ぬやうなことがなけりやいゝが……復活祭のお菓子を頒けてやらなかつたが、本當は、頒けてやるんだつたなあ、リザヴェーダ。あの男だつて精進目を始めたかつたんだ。」

太陽は昇つた。が、踊りながら昇つたかどうか、トリチャーコフは見なかつた。彼は家路の間中、黙りこんだまゝ想ひに沈んで、馬の尾をちつと見詰めてゐた。何か底知れない、一種悲哀の念に襲はれて、大祭日の歡びの印象が打ち消されてゆくやうな氣がした。

家へ着くと、彼は百姓たちに言つた。

「キリスト復活祭お芽出たう！」

彼は楽しい氣分を取りもどして、饑舌しやくりはじめた。が、坐を占めて、精進目を始めるために復活祭のお菓子を一片つまんだ時、彼は口惜むやうな眼付で女房を振りかへりながら言つた。

「あのコサツク人に一片食べさせてやらなかつたのは、良くないことだつたなあ！ リザヴェーダ。」

「あなたは變な人ですわね、」とリザヴェーダは呆れ顔で肩を揺すりながら言つた。「復活祭のお菓子を途中で頒けるなんて、そんな仕來たりは何處にだつてありませんよ。たゞの肉片とはちがひ

ますからね！ 今、この通り切つて、卓に置いてあるからには、誰に食べさせようか——あのコサツク人に食べさせようか——同じこつてすけれど！ わたし、意地悪に言つたんぢやありませんよ。」

トリチャーコフはお茶を半ばいほど飲んだゝけで、その他には食べもしなければ、飲みもしなかつた。彼は空腹を感じなかつた。お茶は咽喉へつかへるやうな氣がした。そして再び言ひ知れぬ悲哀に襲はれた。精進初めのお祈いのりをあげた後で、夫婦は眠るために横になつた。やがて二時間ばかり経つて、リザヴェーダは眼を覺ましたが、その時トリチャーコフは窓際に立つて、中庭を眺めてゐた。

「あなた、もう起きたの？」

「何故だか、眠れないんだ、」と彼は嘆息をついた。「あゝ、リザヴェーダ、お前と私は、あのコサツク人に不親切なことをした！」

「まだコサツク人の事を言つてるんですね！」と女房は欠伸した。「あの男の生靈でも憑いたんですか？」

「あのコサツク人は皇帝に奉仕した人間だ。血を流して戦つて來た兵士だ。それを私たちは豚の

やうに扱つた。あの病人は、家へ連れて来て、食べさせてやらなければならなかつたんだ。だのに、私たちは一片の麴麩さへ與へなかつた。」

「何て譯もないのに、復活祭のお菓子を碎すなんて、飛んでもないこつてすもの！ それも祝福のお祈禱をうけて来たお菓子を！ もしか途中で切つて来たら、歸つてから私がどんなに馬鹿に見られたか知れないぢやありませんか？」

女房の言葉には何にも答へずに、マキシムは臺所へいつて、そのお菓子を一片と玉子を半ダースと一緒にナブキンに包んだ。そして農夫小舎へ行つた。

「クジマ、お前、手風琴をお止めにして、」と農夫の一人に言つた。「栗毛かイワンチツクに鞍をおいて、『曲谷』まで急いで行つてくれ。あすこに馬をとめたコサツク人が、病氣になつて休んでるから、これをやつてくれ。まだ、行ちまやしないだらう。」

マキシムはかうしてまた楽しい気分になつた。が、二三時間クジマの歸りを待つてゐる中に、彼はぢつとしてゐられなくなつた。彼は馬に鞍をおいて、クジマを見に出かけた。ちやうど『曲谷』のところまでクジマに出會つた。

「どうした、コサツク人はゐるか？」

「どこにも見當りませんでしたよ。どこかへ行つちまつたんでせう。」

「ふん……奇體だなあ。」

トリチャーコフはクジマから包みをとつて、なほ先方へと馬を走らした。シユストーウオにつくと、彼は百姓たちに訊ねた。

「おい、お前さん方、馬を連れたコサツク人を見かけなかつたかね？ こゝを通らなかつたかね？ 栗毛馬にのつた頭髮の赤い男だ。」

百姓たちは顔を見合はして、そんなコサツク人は見かけなかつたと言つた。

「郵便馬車は通つたが、他にはコサツク人も、そんな風な者も通らなかつた。」

マキシムは晝食の時間に家へ歸つた。

「私はあのコサツク人のことが氣になつてしようがねえ。お前は勝手に食事をしてくれ。あのコサツクのことを思ふと、どうにも苦しくなる。ひよつとしたら、神様が、使徒の方か天使をコサツクの姿に變へて、私たちを試しにお遣はしになつたんぢやないか？ さういふ事は昔からあるものだ。私達があの男に不親切なことにしたのは、良くなかつたよ、リザヴェーダ！」

「あんたは、あのコサツク人のことで、どうしてさう私をいぢめるんです？」とリザヴェーダは

たうとう痼癢を起しながら叫んだ。「あなたはタール油のやうに、あのことにこびり着いてるのね！」

「お前が親切でなかつたからだ……」とマキシムは女房の顔を見詰めながら言つた。そして彼は、結婚後初めて、女房の不親切なのに気がついた。

「不親切だつたかも知れないけど、」とリザヴェーダは匙をとんとんやりながら叫んだ。「復活祭のお菓子を、途中で酔つばらひなんぞに頒けてやる気にはなりませんわ。」

「あのコサツク人は酔つちやるなかつた。」

「酔つばらつてたわ。」

「ふん、さう思ふのは、お前が謙けだからだ！」

マキシムは卓から跳びのいて、女房の冷酷と愚鈍とを叱責しはじめた。彼女も腹を立つて、彼の叱責をあべこべに叱責しながら、わめき聲に泣き出して、私は父親のところへ歸つてしまふからいゝと愚圖つてから、寢臺へはいつてしまつた。トリチャーコフの結婚以來、夫婦間で言ひ争つたのは、これが初めてであつた。彼は女房の顔付を胸に描きながら、夕方まで中庭を歩きまはつた。女房の顔が、今は卑しい醜いものに思はれた。そしてあのコサツク人が彼を窘しめるため

に憑きまといつてゐるかのやうに、その疲れた眼や、よろよろとした足付やが眼先にちらついてゐなかつた。

「お、私たちは人に不親切だつた、」と彼は呟いた。

あたりが暗くなつた時、彼はこれまで曾て感じたことのない心氣沮喪に襲はれた。いかにも屈托した氣持ちと女房に對する腹立たしさとで、彼は結婚前時々やつたやうに、酒を飲んだ。酔つて來ると、言葉も口汚くなり、女房に向つて、愚鈍なこと、顔の醜いことを毒づいた。

彼女は、明日荷物をまとめて、父親のところへ歸つてしまふと怒鳴つた。復活祭の月曜日の朝、彼は自分を宥めるために、尙すこし餘計に飲んで、再び酔ひどれた。

これが機因となつて、彼は墜落に墮ちはじめた。中庭から彼の馬や、牛や、羊や、蜜蜂やが、次第に失はれていつた。マキシムはますます飲んだくれるやうになつて、借財はだんだんと嵩み、彼は女房を忌はしいものに思つた。自分の不幸は、不親切な女房をもつてゐるからだ。あのコサツク人のことで、神の怒を蒙つてゐるのだと決めこんでしまつた。

リザヴェーダは、彼等の破滅を見た。が、誰を非難したらいいのか、彼女には解らなかつた。

私が高等學校の五年生か六年生だつた時、私は祖父さんと一緒に、ドン縣のポリンオーイ・クリエーブコイ村を、ドン・ロストフ地方へと馬車で旅したことを覚えてゐる。それは暑苦しい、ぐつたりする程氣倦い八月の日であつた。私達の眼は自然と臉がふさがり、口は暑さのために開いてゐた、そして乾き切つた風が砂塵埃を捲きあげながら吹きつけて來るので、そこらを眺める氣にもならず、物を言つたり考へたりする氣にもならなかつた。眠さうな眼付をしたカルボといふ小露西亞人の馭者が、馬に鞭をくれて、私の帽子を掠めた時にも、私は一言叱りつけもしなければ文句も言はずに、はつと假睡まごころみからさめて、濛々とした砂煙の中に遙かに遠く見えてゐる一つの村を見るために、唯ぼんやり靜かに眼を見はつたばかりであつた。私たちは大きなアルメニヤの村へはいつて、私の祖父さんの知己だつた或る富裕なアルメニヤ人の家で、馬に飼秣をやるた

めに馬車を停めた。私は生れてから、このアルメニヤ人ほど可笑な男を見たことがなかつた。濃い垂れ下つた眉毛をもつた、鬚を剃りつけた小さな顔、鳥の嘴のやうに尖つた鼻、長い灰色の口髭、櫻の木で出來た長い土耳其煙管を啣へた大きな口、さういふ容子を描いて見給へ。その小さい頭は、短い赤のジャケツに明るい青色無地の下跨ズボンといふ奇ファンタスティック異な服装に飾られた曲つた駝背の體軀に醜くくつ附いてゐた。體が脚を踏んばつて、上靴スリッパを引摺りながら歩いた。口から土耳其煙管を離さずに物を言つた。そして微笑みも浮べずに、しかし眼を一ぱいに見張つて、いかにもアルメニヤ人らしい勿體ぶつた容子を示しながら、お客様たちに對して出來るだけ無頓着に見せやうとしてゐた。

アルメニヤ人の部屋は風も通さず、埃塵も立たなかつた。が、草原ステップや往來と同じやうに息苦しく不愉快であつた。私は塵埃まみれになつて、暑さのためにぐつたりとして、その片隅の緑色の箱に腰を下したことを覚えてゐる。塗つてない木の壁、家具、黄色い粘土で塗つてある板敷、太陽に照り曝された乾いた木の匂。あたりを見ると、何處もかしこも蠅が一ぱい群つてゐた……祖父さんとアルメニヤ人とは牧草のことや、肥料のことや、燕麥のことやを話してゐた……私は二人が湯沸サモワールの湧くのを楽しみに話してゐることや、祖父さんがお茶を飲むのに一時間以上もかゝ

ることや、それから二三時間午睡するにちがひないことや、そのために私が四時間ばかりぼんやり待つてゐなければならぬことや、その後でまた、暑さと塵埃との中をがたがたと馬車に揺られて行かなければならぬことやを私は知つてゐた。私は二人がごそごそ話してゐる聲に耳傾けてゐた。そして長い長い間、このアルメニヤ人や、陶器のはいつてゐる戸棚や、蠅の群や、焼きつくやうに太陽の照り込んでゐる窓を眺めてゐなければならぬのかと言ふ氣がした。長い時間の後でなければそれがお終ひにならないのだと思ふと、草原や、太陽や、蠅共が忌々しくなつてならなかつた……

頭巾を掻きつけた小露西亞人の百姓が、お茶の道具をのせたお盆をもつてはいつて來た。それから湯沸を運んで來た。アルメニヤ人は靜かに廊下へ出ていつて叫んだ。

「マーシヤ、お茶を注ぎに來い！どこへ行つてゐるんだ？マーシヤ」

小早な足音が聞えた。そして質素な更紗の服と曰い頭巾とを着けた、年頃十六七の娘が部屋へはいつて來た。茶碗を洗つてお茶を注いだ時、彼女は私の方へ背中を向けて立つてゐた。そして私が見ることの出來たすべては、彼女の體付のすらりとしてゐること、裸足で、その小さい踵が長い下跨に隠れてゐることなどであつた。卓につきながら、私はお茶のユツプを渡してくれたそ

の娘をちらりと見た。すると忽ち、風がさつと私の心の中を吹き通つて、塵埃や、氣倦るさや、その日のさまざまな印象を一時に拂ひ去つてしまつたやうな氣がした。私はこれまで實際にも又夢にも見たことのない、この上もなく美しい顔をもつた、恍惚させるやうな一つの姿を見たのであつた。私の前に一人の美しい少女が立つてゐた。私は一目見たばかりで、稻妻にでも打たれたかのやうな氣がした。

私はマーシヤ——彼女の父親が呼んだやうにマーシヤ——こそ眞の美少女だと思つた。が、それを何と云ひ表はしていか知らなかつた。地平線の上には、時折色々な雲が重なり合つて、太陽はその蔭になり、眞紅や、オレンジや、黄金色や、ライラックや、どんよりしたピンクや——ありと凡ゆる色彩をもつて、それ等の雲や大空を色どつた。坊さんのやうな形をしたのや、魚のやうな形のや、居酒屋にゐる土耳其人のやうに見えるのや、色々な雲があつた。大空の三分の一を掩ふた落日の光は、會堂の十字架にきらきらと輝き、田舎家の窓に照り榮へ、河や沼に反映し、樹々の上にもちらつた。日没の光景を背景にして、遙か遠くの方に、野鴨の群が嘴をさして飛んで行つた……牝牛の群を追つてゐる子供や、堰の向うに馬車を驅つてゆく測量師や、散歩をしてゐる紳士たちは、みんな日没の光景を眺めてゐた。そして誰れもみんな、その素晴らしい

美しさに打たれてゐた。が、その美が何物の中に横はつてゐるのか、誰れも知らないのであつた。また言葉に表はすことも出来ないのであつた。

アルメニヤ人の娘を美しく思つたのは、私だけではなかつた。もう七十からのお爺さんで、女や自然の美に對してはまるで無頓着になつてゐる私の祖父さんも、一分ばかりの間マーシヤを可愛いらしさうな眼付で眺めてから訊いた。

「あんたの娘御かね、アヴェルト・ナザーリツチ。」

「左様で、私の娘でございます。」とアルメニヤ人は答へた。

「美しい少女ぢやな、」と私の祖父さんは羨嘆するやうな調子で云つた。

或る美術家は、アルメニヤ娘の美しさは古典的で嚴肅だと評するにちがひない。その美は、正しく斯ういふのこそ均整な支體といふ觀念を抱かせるやうな——何故かは分らないが！——靜觀の美であつた。その頭髮、眼、鼻、口、頸、胸、そして若々しい體の凡ゆる動作、それ等はすべて、自然が一つの微小な線をも過たずに創造した一つの完全な調和の中に、よく均齊がとれてゐた。何故ともなく、理想的な美少女といふものは、マーシヤのやうに眞直な、少し鉤なりになつた鼻と、かうした大きい黒い眼と、長い睫毛と、惱ましげな視線とをもたなければならぬと

思はれるのであつた。彼女の黒い捲毛の髪と眉毛とは、ちやうど緑の蘆が靜かな流れとよく調和してゐるやうに、彼女の頭や頬の和かな白い色とよくつり合つてゐた。マーシヤの白い頸首とその若々しい胸格とは、まだ發達しきつてはゐなかつたが、偉大な創造力をもつた天才でなければ、そんな風に美しい形を制作することは出来ないであらう。マーシヤを見てゐれば見てゐる程、いつかだんだんと、彼女は彼女自身が備へてゐると同じやうに特別に愉快な、誠實な、美しい或る事を、彼女に言つて見たいといふ欲望を抱かせずには措かない程であつた。

最初私はマーシヤが少しも私に注意を拂はず、始終俯目になつてゐるのを苛立たしく口惜しく思つた。私にはそこに一種異常な威嚴のある幸福な空氣が、私と彼女との間を遮つて、嫉妬深く私の眼から彼女を掩ひ隠してゐるやうな氣がした。

「だが、私が塵埃だらけになつてゐるせゐだ、」と私は考へた。「日に焼けてもゐるし、それにまだ私が子供だからだ。」

が、次第に私は自分といふものを忘れて、いつか全然美の觀念に有頂天になつてしまつた。私は最早や氣倦い草原のことも砂塵埃のことも思はなかつた。もはや蠅のうなり聲も耳につかなかつた。お茶の味も分らなかつた。たゞ卓の向側に一人の美しい娘が立つてゐるといふことの他に

は何にも感じなかつた。

私の味つたこの美感は何分奇妙なものであつた。マーシヤが私の心中に喚び起した感情は情欲でもなければ恍惚でもなく、また快樂の念でもなく、それは楽しい哀愁を伴つた一種の苦惱であつた。さながら夢のやうに漠然として取留めない哀愁であつた。何故ともなく私は自分自身に對し、私の祖父さんやアルメニヤ人に對し、この少女その人に對してさへ哀れを感じたのであつた。そして私は私たち四人のものが、今後再び看出すことはないであらうと思はれるやうな人生に於ける最も重要な本質的な何物かを失つたやうな感情を抱いたのであつた。私の祖父さんも陰鬱に沈んでいつた。もはや肥料や燕麥の話はせずに、いちらしさうにマーシヤを眺めながら黙つて坐つてゐた。

お茶の後で私の祖父さんが假睡をしてゐる間に、私は玄関口へ出ていつた。この家はアルメニヤの村のどの家もさうであるやうに、眞日向に立つてゐた。そこには一本の樹もなければ天幕張りもなく、日避けもなかつた。藜や錦葵の茂つてゐるアルメニヤ特有の大きな中庭は、焦りつくやうな暑さにも拘らず、陽気で楽しかつた。大きな中庭のそこ此處を横切つてゐる低い籐籠の蔭では穀打ちをやつてゐた。穀打場の中央に立つてゐる一本の柱の周圍には、一つの長い輻射線

を形造るやうに二頭づゝ並べて繋がれた十二頭の馬がぐるぐる走りまはつてゐた。長い調衣に長下袴を着けた一人の小露西亞人が、その側を歩きながら、馬を愚弄して、馬に自分の威勢を見せつけるやうに、鞭をびしびし鳴らしたり怒鳴つたりしてゐた。

「ア……ア……ア、こん畜生！ア……ア……ア、極道奴！何をびくついてやがるんだ？」
栗毛のや、白や、斑や、馬共は何故自分達が一つ場所をぐるぐる廻つて麥藁を踏まされるのか分らずに、腹立たしげに尻尾を振りながら、努めてやつとしてゐるかのやうに不承々に走つてゐた。風がその蹄の下から黄金色の粗穀の塵埃を舞ひ立たして、籐籠の向うへ吹きつけていつた。高い眞新しい藁塚の傍には、熊手を手にした大勢の百姓女が集まつてゐた。そして荷馬車が出たり入つたりしてゐた。他の中庭の藁塚のあたりでは、同じやうに十二頭の馬が柱の周圍をぐるぐる走りまはり、同じやうな小露西亞人が鞭を鳴らしたり馬を怒鳴りつけたりしてゐた。

私の腰かけてゐた階段は暑かつた。細い手欄や窓框のそこ此處には、酷熱のために木から脂が滲み出してゐた。赤い太陽虫が階段や鎧屏の影の縮目にぞろぞろと群つてゐた。太陽は私の頭や胸や背中をぢりぢり照りつけてゐたが、私は少しも氣にかけなかつた。そして廊下や私の背後の部屋の間凸した板敷にお茶の道具を片づけてから、マーシヤは階段を駆け下りて、私の傍を通

り過ぎた。その時空気をそよそよとそよがせながら、小さな汚らしい離屋へ鳥のやうに飛んでいった——私はそれを厨房だらうと思つた——そこからは焼肉の匂ひがして、荒つぽいアルメニヤ言葉が聞えて来た。彼女の姿が暗い扉口に消えると、お代りに緑色の下袴をはいた、腰の曲つた、顔の赤いアルメニア人のお婆さんが摺の上に姿を現はした。お婆さんはぶりぶりして誰れかを叱りつけてゐた。と、直ぐに又、マーシヤが厨房の暑さに顔を眞赤にして、肩に大きな黒麵麩を擦りながら扉口へ出て来た。彼女は重い麵麩を支へるためにお可笑な風に體を揺すりながら、穀打場の方へと小走りに中庭を横切つて、簀籠を跳び越へたり黄金色の藁塵埃に包まれたりしながら、荷馬車の蔭に姿を消した。馬を指揮してゐた小露西亞人は鞭を低く下して、黙り込んでしまつた。そして一寸の間荷馬車の方をちつと見詰めてゐた。やがてまたアルメニヤ娘が馬の傍を駆け通つて、簀籠を跳び越した時、彼は眼で彼女を追つてゐた。そして酷く失望したやうな調子で馬を怒鳴りつけた。

「くたばりやがれ、この小汚ない畜生奴が！」

私は絶えず彼女の足音に耳を澄ましたり、打沈んだ、うつとりしたやうな顔付をして中庭を横切つてゆく彼女の姿を眺めたりしてゐた。彼女は階段を駆け下りて、私の周囲の空気をそよがせ

て行つたり、厨房へはいつて行つたり、穀打場へ飛んで行つたり、門を出て行つたりするので、彼女を見守るためにあつち此方へ顔を振り向けるのが忙しい程であつた。

彼女の美しい姿が幾度も私の傍を通つた間に、私の哀愁は一さう募つていつた。私は彼女に對しても、自分自身に對しても、彼女が藁塵埃の中を荷馬車の方へと走つてゆく度に惱ましげな眼付で彼女を眺めてゐる小露西亞人に對しても哀れを感じた。それは彼女の美しさに對する嫉妬なのか、この少女が私のものではなく、又未來にも私のものにはならないであらう事を悲しく思ふためなのか、私といふものが彼女にとつて赤の他人であることを悲しく思ふためなのか、それとも又、彼女の稀有な美しさが唯要もない偶然的なものである事を、そして地上の凡ゆる物と同じやうに、ほんの短い間しか續かないのだといふ事を私が漠然と感じたためなのか、或はまた、私の哀愁は、眞の美の醜観に依つて人間の心中に喚び起された一種特異な感情であつたのか、私には分らなかつた。

待たされた三時間かいつの間にか過ぎ去つた。カルボが馬を河へ連れていつて水を浴びさせ、歸つて来て鞍に繋ぎはじめた時、私はまた充分にマーシヤを眺める時間がなかつたやうな氣がした。濡れた馬は喜ばしげに鼻息を鳴らして、蹄で鞍を蹴りつけてゐた。カルボはそれを叱りつ

けた。

「どうつ！」

私の祖父さんは起きあがつた。マーシヤは私たちのためにぎいぎい音のする門の扉を開けた。私たちは遊覧馬車に乗つて、中庭を出た。私たちはお互に腹でも立てゝゐるやうに黙り込んだまま旅をつゞけた。

それから二三時間経つて、遠く遙かにロストフとナヒチエヴァンの村が見えると、今迄ずっと黙り込んでゐたカルボは、急にあたりを見まはしながら言つた。

「あのアルメニヤ娘は別嬪でしたなあ。」

そして彼は馬に鞭をあてた。

二

それからもう一度の時は、私が大學生になつてから、汽車で南の地方へ旅行した時のことであつた。それは五月であつた。確かベエルゴロオドとハリコフの間だつたと思ふが、停車場の一つで、私はブラットフォームを散歩するために列車から下りた。

黄昏の色は既に停車場の庭園にも、ブラットフォームにも、野の面にも擴がつてゐた。落日の光は停車場の建物に遮られてゐたが、機關から吐き出される煙の頂上が蔷薇色の光に染つてゐるので、夕榮えのまだ消え残つてゐるのが分つた。

私はブラットフォームを往つたり來つたりしながら、或る二等客車の近くに澤山の旅客が立つたり歩いたりしてゐて、その客車の中に誰れか名高い人が乗つてゐるやうに、そつちを眺めてゐるのに私は不圖氣がついた。この客車の近くで、私の出會つた物見高い連中のうちに、私の道づれで——多くの者がさうであるやうに、その人とは偶然途中で一緒になつてまだ知己になつたばかりであつたが——伶俐な、氣の善い深切な男である砲兵士官のゐるのが私の眼にはいつた。

「あなたは何を見てゐらつしやるんです？」と私は訊いた。

彼は何とも答へずに、唯眼付で一人の女の姿を指し示した。それは帽子無しで、一方の肩に小さい肩掛を無頓着に垂れ下げて、露西亞服をまとつた十七八の若い娘であつた。彼女は旅客ではなく、驛長の妹か娘にちがひないと私は思つた。彼女は車窓の傍に立つて、客車の中にある年取つた一人の女と話してゐた。と、私はまだ彼女をよくも見ない中に、忽ち以前アルメニヤの村で経験したと同じやうな感情に壓倒されてしまつた。

その娘は素晴らしい美人であつた。そして私の眼に美しく見えたばかりでなく、私と同様に彼女を見詰めてゐた大勢の人々にも美しく見えたにちがひなかつた。

もし外貌に表はれただけで彼女の容色を描くとすれば、眞に美しいのは、頭の周りに黒リボンを描いて、ゆるやかに垂れ下げた房々と波打つてゐる美しい頭髮だけで、他の凡ての容姿は、非常な變則か異常かであつた。特殊な愛嬌のためか、それとも近視眼のためか、彼女は始終眼をばちばちさせてゐた。鼻は變に上へ反りかへり、口は小さく、^{アロアイル}横顔は貧弱で卒氣なく歪んでゐた。その肩も狭くて、彼女の年にしては發達してゐなかつた——而も尙この少女は眞に美人の印象を與へた。彼女を眺めながら、私は露西亞人の顔といふものは、美のために端正な調和を必要としないものだといふ觀念を持つことが出来た。更に言へば、もしその反り返つた鼻の代りに、アルメニヤ娘のそのやうな、申分のない端正な彫刻的な鼻をこの少女につけたとしたら、その變化のために、この少女の顔は全然魅力を失つてしまふにちがひなかつた。

窓際に立つて饒舌りながら、少女は黄昏の濕つばさに肩を揺すつたり、頻りなしに私達を見まはしたり、一寸腕を突張らせて見たり、頭髮を直すために頭へ手をやつて見たり、饒舌つたり笑つたりしてゐた。その間彼女の顔は、今驚きの色を浮べたかと思ふと、直ぐにまた恐怖の表情に

變るといつた風で、一分もその顔付と身振りとがちつと留つてゐなかつた。紛れもなくこれらの微細な、變幻極りなき優雅な動作や、その笑顔や、顔付の變化や、私達を見る時の素早い眼付や、彼女の笑聲や話聲の中に響いてゐるその若々しさと新鮮さと魂の純潔さと一緒になつて表に現はれる動作、私たちが子供や鳥や小鹿に對して非常に愛らしく思ふと同じやうな繊弱さと一緒になつて表に現はれる動作の微妙な氣品の中に、彼女の美の祕密と魔力とは横はつてゐるのであつた。

それは舞踏や、庭園の遊戲や、談笑や、宴席に適はしく、眞面目な思想や、悲しみや、休息には適しない胡蝶の美しさであつた。そして若しこのブラットフォームに疾風がどつと襲つて來るか、驟雨が降つて來るかしたら、その繊弱な體はなよなよと萎れてしまつて、氣まぐれな美が花の花粉のやうに飛び散つてしまふだらうといふ風に思はれた。

「じ……じつさい……」第二の鈴が鳴つてから、私たちが自分の車席に戻つてゆく時士官は溜息と一緒に呟いた。

この「じ……じつさい！」が何を意味してゐるのか、私にははつきり分らなかつた。恐らく彼は悲しみを感じたのであらう。この美人と春の黄昏とに別れて、息詰るやうな列車の

中へはいりたくなかつたのであらう。さも無ければ又、私と同じやうに、この美人に對し、彼自身に對し、私に對し、又ぐつたりとして不承々々に自分の車輛へ返つてゆく凡ての旅客に對して哀れを感じたのであらう。電信器の前に、突立つたやうな縮髪の血色の悪い頬の廣い顔をもつた、白つ茶けた赤毛の電信技師の坐つてゐる停車場の窓を通つた時、士官は深い溜息をつきながら言つた。

「あの可愛らしい娘には、きつと、あの電信技師が戀してゐるにちがひありませんよ、賭をしてもいいです。あんな妖精のやうな少女と一つ屋根の下で自由に暮らしてゐて、戀に落ちないといふことは如何したつて出来やしませんからね。そして何といふ不幸でせう！ 身分が低いために、生れつきの馬鹿者でもないのに、垢染みた風をして、塵埃だらけになつて頭を屈め込んでゐる人間が、自分を振り向いて見てもくれないやうな、人を小馬鹿にしたあの美しい小娘を戀するといふやうなことは、何と云ふ皮肉な運命でせう。その上若しあの電信技師が、戀をしてゐると同時に妻君のある人間で、その妻君がまた彼自身と同じやうに身分の低い、薄汚い風をした、頭を屈め込んだ人間だとしたら、何と云ふ悲惨でせう。」

私たちの車輛と次の車輛との間の展望臺には、車掌が手欄にもたれて、美しい少女の方を

ちつと眺めてゐた。睡眠不足と汽車の震動とに疲れきつてゐる、脂切つた、皺だらけな、肥満した彼の顔には、宛然その少女の上に、幸福や、彼自身の若さや、謹直さや、純潔さや、妻や、子供達を見たかのやうに、そして又、歳よりも早く老ひこんで、醜い肥満した顔をしてゐる、世間並の男の幸福を、又旅客の幸福をもつた彼にとつては、その少女が自分のものでないのを、彼女が大空ほど遠く距つてゐるのを悲んでゐるかのやうに、優情と深い哀愁との入れ雜つた表情が浮んでゐた……

第三の鈴が鳴つた。汽笛が響き渡つて、汽車が徐ろに動き出した。最初に驛夫と驛長とが、それから庭園と妙に狹猾さうな微笑みを浮べた美しい少女とが、私たちの車窓を通り過ぎた……

私は窓から顔を出して、後を振り返りながら、彼女が汽車を見送つてゐる容子を、例の電信技師の坐つてゐる窓の傍へとプラットフォームを歩いて行く容子を、頭髮を撫でたり、庭園へ駈け込んだりした容子を見た。停車場の建物は最早や落日の光景を遮つてゐなかつた。茫漠とした平野が私たちの前にひらけて來た。が、太陽は既に沈んで、夕靄が緑の絨氈を敷き連ねたやうな若い麥畑の上に這ひかゝつてゐた。春の空氣も、暮れゆく大空も、客車の中も何となく物悲しかつた。見覚えのある車掌の姿が車内へはいつて來た。そして蠟燭に火をつけはじめた。

往診

294

リヤリコフ工場から教授のところへ一通の電報が来た。出来るだけ急いで、出向いてほしいといふのであつた。明かに、その工場の所有者であるマダム・リヤリコフの娘の誰かと病氣になつて、この長文句の狼狽^{うんたい}へた電報をよこしたものにちがひない。教授は自分では往診しないので、助手のコロリコフを差し向けた。

そこはモスクワから二驛先で、驛から四露里の郊外であつた。驛には三頭曳の馬車が、コロリコフを迎へに出てゐた。孔雀の羽飾りのついた帽子をかぶつた馭者は、兵士のやうに聲高な調子で、問ひに答へた。

「いゝえ、あなた！」「承知いたしました、あなた！」

土曜日の夕であつた。太陽は落ちかゝり、工員たちは工場から驛へと、群をなして歸りつゝあつた。彼等はコロリコフの乗つた馬車に點頭^{うなづ}をした。彼は夕暮れの風景に魅惑され、途上に見

る農場の家々や、別荘や、樺の樹や、あたりの静かな大氣に魅惑された。今、野良も、森も、太陽も、祭日の夕の工員たちと同じやうに安息に入らうとして……お祈禱^{いのり}をあげてゐるかのやうに思はれた……

彼はモスクワで生れ、モスクワで育つたので、田舎といふものを知らなかつた。工場には何らの興味をもつてゐなかつたし、内部へはいつて見たこともなかつた。が、多くの工場について讀んだことはあつた。製作者の家に行つたこと、彼らと話し交はしたこともあつた。彼は遠く、また近く、工場を見るたびに、外見はいかにも静かで平和であるが、内部では、所有者の側に譯のわからない無智と陋劣な自己主義^{エゴイズム}があり、工員の側には、怠慢や、病氣の苦惱や、喧嘩や、毒蟲や、火酒^{ウイッパ}のあることを何時も感じた。そして今、彼らが馬車に向つて、おづおづと途をあげた時、彼らの顔付には、その帽子には、その歩調には、肉體の不潔、醉態、神經衰弱、困惑などのあることを彼は知つた。

馬車は工場の門をはいつた。その兩側にある工員の小さな長屋、女たちの顔、柵に干してある蒲團、リンネルの布などが彼の眼を掠めた。

「氣をつけろ！」と馭者は馬の手綱をゆるめずに叫んだ。

295

構内は廣かつた。丈の高い煙穴が一本一本すこしづゝ距離をおいて並び、倉庫や、バラツクをもつた建物、五棟つゞいて一つの大きな集團をなしてゐた。それら凡ての屋根は、塵埃をかぶつたやうに、灰色した何かの粉で汚れてゐた。廣場のそこ此處には、沙漠の緑地帯のやうに、小さな園があり、赤屋根、青屋根の小さな家が建つてゐて、管理人や書記が住んでゐた。馭者は不意に手綱をゆるめた。近頃灰色に塗るかへられたばかりの家の前で馬車は停つた。そこには、塵埃で汚れたライラックの植込みをもつた花園があつて、正面の扉口の黄色い階段は、塗料の強い匂がした。

「先生、どうぞ、お上りくださいませ。」廊下と入口とで女の聲が言つた。同時に、彼は溜息と囁聲を聞いた。「どうぞ、こちらへ。困りまして、どんなにお待ちしてをりましたか……どうぞ、こちらへ。」

マダム・リヤリコフ——流行型の袖のついた黒の絹服を着た、むつくり肥つた年とつた淑女ではあるが、その顔付から判断すると、あまり教育のない、素朴な女——は、おどおどした身振で、醫師を見詰めたまゝ、握手の挨拶をしなかつた。多分、恐縮してゐたのであらう。彼女の傍には、頭髮の短い、鼻眼鏡をかけた一人の女が立つてゐた。彼女は雑多な色を織りませた寛衣を着てゐ

た。非常に瘦せた、あまり若くない女であつた。下婢は彼女をクリスティーナ・ドミトリエフナと呼んでゐた。この女は家庭婦だなどコロリコフは推察した。多分、この家の中で一ばん教育のある人間として、彼女は醫師に應接する役目を引きうけてゐるのにちがひない。彼女は、直ぐさま、病氣の原因をせかせかと述べ立て、些末な、どちらでもいゝやうな細い點まで報告した。が、病人は誰なのか、病状はどんな具合なのか、一言もいはなかつた。

醫師と家庭婦とが座について話してゐた時、家の女主人は、扉口にちつと立つて待つてゐた。話の間に、病人はマダム・リヤリコフの一人子で相續人であるリーダといふ、今年二十歳の娘であることを醫師は知つた。彼女は、今まで長いこと病床にあつて、幾人もの醫師にかゝつてゐた。そして昨夜は、心臓が烈しい動悸を起し、一晩中苦み通して、誰も眠ることが出来ず、もしや死ぬのではないかとみんなを悩ませたのであつた。

「あの人は、子供の時から病氣があつたといふことです。」とクリスティーナ・ドミトリエフナは絶えず手で唇を拭ひながら、歌ふやうな調子で言つた。「少女時代は、瘰癧に苦んでゐたさうですわ。お醫者さんが、それを追ひ込んでしまひましたので、それが病氣の原因になつたんだと思ひますわ。」

彼らは患者を見にいつた。身なりが大きく、丈が高く、十分に生長した、しかし母親と同じやうに不^ふ容^り色^さで、同じ小さい眼と下の方が不^ふ釣^{てい}合^あに幅^あ廣^くい顔をもつた彼女は、頭髮をもちやもちやにして、頤^いのところまで蒲^ふ團^{だん}をかぶつてゐたので、たちまちコロリヨフに、この部屋に傷々しく保護されてゐる、衰^せれな痺^{しび}弱^{じやく}た生物の印象を與へた。そして醫師^い師^しには、この娘が、あの五棟^ごの大きな建^た物^{ぶつ}の相^あ續^つ人^{にん}とは思へなかつた。

「私は醫者^い者^{しや}です、あなたを診察^{しん}察^{さつ}にあげりました、」とコロリヨフは言つた。「今晚^{こん}は。」

彼は名前^なを告^つげて、大きな、冷^れめたい、不^ふ格^{かく}好^{こう}な彼女の手を握^{にぎ}つた。彼女は坐^まつて、醫者^い者^{しや}に馴^なれきつた態度^{たい}で、何^{なに}の臆^{おそ}面^{めん}もなく、服^{ふく}をぬいで肩^{かた}と胸^{むね}とをむき出しにしながら、彼の打^う診^{しん}にまかせた。

「心臓^{しん}がとて^とも動^う悸^き打^うちますの、」と彼女は言つた。「昨夜^そは夜^よ通^とし苦^くみましました。苦^くしくつて、死ぬかと思^{おも}ひましたわ。どうかして下さい。」

「いゝです、承^う知^ちしました。氣^きを落^おちつけていらつしやらなければいけません。」

コロリヨフは彼女を診察^{しん}察^{さつ}して、肩^{かた}をしゃくりあげた。

「心臓^{しん}は大^{だい}丈^{ぢやう}夫^ふです、」と彼は言つた。「何^{なに}の異^い状^{じやう}もなく、十分^{じふ}にはたらいてゐます。あなたの神^{しん}經^{けい}

が、少々^い々^{じやう}惡^い戯^たをしたらしいですね。これなら普通^ふ通^との狀態^{じやう}ですよ。發^{はつ}作^{さく}的^{てき}な衝^{しやう}動^{どう}は、とつくに終^おつたと言^いつていゝです。横^{よこ}になつて、ぐつすりお眠^いりになるこつてす。」

その時、一つの洋^{やう}燈^{てん}が、この病^{びやう}室^{しつ}へ運^うびこまれた。病人^{びやう}はその光^{ひかり}に眼^{まなこ}をくるくるさせてゐたが、不^ふ意^いに、頭^{あたま}へ手^てをやつて、咽^{のど}び泣^なきに泣^なきだした。すると、痺^{しび}弱^{じやく}な不^ふ容^り色^さな生物^{せいぶつ}の印象^{いん}象^{さう}は消^けえ失^しせて、コロリヨフには、もはや、その小さい眼^{まなこ}も、下^{した}の方^{かた}の不^ふ釣^{てい}合^あな幅^あ廣^くい顔^{かほ}も、氣^きにならなくなつた。彼は、そこに聰^{そう}明^{めい}な、魅^{めい}力^{りき}のこもつた、和^わやかな、物^{ぶつ}惱^{なう}ましげな表情^{へい}を看^み出した。今^{いま}、彼^{かれ}には、その表情^{へい}が、淑^{しゆ}やか^かに優^{ゆう}しい、女^にらしい、純^{じゆん}真^まなものに思^{おも}はれた。そして彼は、藥^{やく}品^{ひん}をもつてどなく、勸^{くわん}告^{こく}に依^よつてでもなく、眞^ま實^{じつ}な、親^{おん}み深^{ふか}い言^{ごん}葉^{えつ}で彼女^{かのじよ}を慰^{なぐさ}めてやりたいと思^{おも}つた。彼女の母^{はは}親^{おん}は、娘^{むすめ}の頸^{くび}首^{くび}へ兩^{りやう}手^てをやつて、彼女^{かのじよ}を抱^{かか}きしめた。この年^{とし}とつた母^{はは}親^{おん}の顔^{かほ}は、何^{なに}といふ悲^{かな}しげな、何^{なに}といふ絶^{けつ}望^{ぼう}的な表情^{へい}を浮^うべてゐることか！ 彼女^{かのじよ}を生^いみ、彼女^{かのじよ}を育^{そだ}てたこの母^{はは}親^{おん}は、この娘^{むすめ}に佛^{ぶつ}蘭^{らん}西^{せい}語^ごを、舞^ま踏^{たつ}を、音^{おん}樂^{がく}を習^{まな}はせるために、その全^{ぜん}生^{せい}涯^{えい}をさへげたのであつた。その他のことは顧^こみなかつたのであつた。娘^{むすめ}のために、十^{じゆ}人以上^{にじゆう}も家^か庭^{てい}教^{きやう}師^しを取^とりかへた。幾^{いく}人^{にん}となく立^{りつ}派^ぱな醫^い師^しの診^{しん}察^{さつ}を乞^こふた。そして一人^{ひとり}の家^か庭^{てい}婦^ふを^をおいたのであつた。それにも拘^からず、今^{いま}、かうした悲^{かな}むべき狀^{じやう}態^{たい}におかれるとは、どうした譯^{わけ}であらうか、彼女^{かのじよ}には了^{りやう}解^げ出^だ來^{らい}なかつた

——彼女は、思ひめぐらしても思ひ當らず、たゞ昏迷するだけであつた。さながら、重要な何物かを等閑なほざりにしてゐたかのやうに、爲すべき何物かを忘れてゐたかのやうに、誰かを招くことを——それが誰であるかは分らなかつたが——考へ落おとしてゐたかのやうに、罪ありげな、おどおどとした困惑の表情を浮べるだけであつた。

「リーザンカ、お前はまた……泣いて、泣いてゐるのね、」と母親は娘を抱きしめた。「私の愛、私の愛、私の子供、どうしたの？ 言つておくれ。私を悲しませないでおくれ！ ねえ、言つておくれ！」

二人とも烈しく啜り泣いてゐた。コロリコフは寢臺の傍に腰をおろして、彼女の手をとつた。

「さあ、もういゝです。泣くことはありませんよ、」と彼は優しく言つた。「涙をこぼすほどの事は何にもありません。さあ、お二人とも、泣くのはお止めなさい、詰らないですから……」
そして心中に彼は思つた。

「この娘は、ちやうど良い婚期だ……」

「私たちの工場の醫師は、あの人に加里臭素酸鹽カリブプロマチを處方しました、」と家庭婦は言つた。「けれど、それが却つて悪い結果を招いたんぢやないでせうか。心臟藥をあげるのですしたら、ドロツプの方

が良いと思ひますわ……名前を忘れましたが……たしか、君影草劑コシバカラフとかいふ……」

つゞいて、いろいろな細かい話に移つていつた。家庭婦は、彼の言葉を遮つたり、防げたりした。そして彼女の顔付には、この家で一ばん教育のある女として、醫師と交渉するのを自分の義務と考へてゐるらしい、一種緊張した表情が浮んでゐた。彼女の言葉は、藥劑のほかの題目にはわたらなかつた。

醫師はうんざりしてしまつた。

「何にも格別な症状はありません、」と彼は寢室を出てゆく時、母親に向つて言つた。「工場醫がお嬢さんの主事醫になつてをられるのですしたら、そのまゝ、その醫師に任せてお置きになるがいいです。今までの處置は、すこしも間違つてはゐません。あなたのお醫者を換へる理由はないです。何故、お換へになるのですか？ かういふのは極く普通の病狀です。特にどこが悪いといふ點はありません。」

彼は手套をはめながら、落着きはらつて言つた。その間、マダム・リヤリコフは身ぢろぎもせず
に佇んで、涙ぐんだ眼で醫師を見詰めてゐた。

「十時の汽車まで、もう一時間半しかありません、」と彼は言つた。「それに遅れないやうに、失

「禮します。」

「お泊りくださることは出来ませんか？」と彼女は訊いた。再び彼女の頬に涙が流れおちた。「あなたをお騒がせして、お耻かしうございますけれど、もしさうして頂けますなら……神様のために、」と彼女は扉口の方にちらちら眼をやりながら、低聲でつぶやいた。「今夜、お泊りになつてくださいますか！ あの娘だけが私の大切なものでございます……私の一人っきりの娘なのでございます……昨晩は喫驚させられました。私には、どうすることも出来ませんでした……どうぞ、お歸りにならないで下さいませ、神様のために！」

彼は、モスクワにたくさんの仕事がつてゐることを、同時にまた、家族の者が待つてゐることを告げたいと思つた。必要もないのに、この奇怪な家で一と晩過すといふことは、不快でなからなかつた。が、彼女の顔を見ると、溜息をついて、一言もいはずに、手套をぬぎはじめた。

客間と食堂にある凡ての洋燈が、彼への歡待のために點された。彼はピアノの前に腰かけて、樂譜をめくりはじめた。それから壁にかゝつてゐる畫や肖像を眺めた。金色の額縁にはいつてゐる油畫は——一つの船を浮べた嵐の海——クリミヤ半島の風景畫と、葡萄酒の杯をもつたカソリツクの坊さんの畫であつた。いづれも、鈍感な、たゞ滑つこく塗られてゐるだけのもので、藝術

味の乏しい作品であつた。幾枚かの肖像畫には、立派な容貌風彩をもつた人物は一人もなく、幅廣な頬骨や、きよとんとした眼付のほかには、眼を惹きつける何物もなかつた。リーダーの父親のリュッコフは、狭い額と勿體ぶつた表情をもつてゐた。彼の制服は、その大兵肥滿の粗野な體軀を、一つの包のやうに抱えてゐた。胸の上には、一つの賞牌と赤十字章とをつけてゐた。あたりには、教養のある印象は少しも見られず、馬鹿げた裝飾は、取つて着けたやうであつた。磨きたてゝある板敷の光澤が、彼には氣持ちわるかつた。枝附燭臺の光も氣持ちわるかつた。そして何故ともなく、いつも頸に賞牌をかけて浴場にはいる或る商人の話と思ひ起さした……

扉口で嘔き聲がした。誰かど、そつと鼻息をもらした。と、不意に、戸外から、會て聴いたことのない、嘎れた、調子つばづれな、金屬的な音響が、コロリョフの耳を打つた。彼には何の物音が見當がつかなかつた。その響は、彼の胸に、一種奇妙な、不快な感じを呼び起した。

「こんなところに住めと言はれたら、何にも氣持ちを落着けるものがなくて、どんなに惨めだらう……」と彼は思つた。そして再び樂譜の前に坐つた。

「醫師、どうぞ晚餐におつき下さいませ、」と家庭婦が低聲で彼を呼んだ。

彼は晚餐の席についた。食卓は大きかつた。幾皿もの料理と、いろいろな飲物の杯が置かれて

あつた。が、食卓についたのは、彼とクリスチーナ・ドミトリエフナと二人だけであつた。彼女は鼻眼鏡を透して彼を眺め、マデイラ酒を飲み、せかせかと食べたが話した。

「私たちの工員は非常に満足してゐます。冬は、毎年演藝會を催しましてね、労働者たちは自分で出演いたします。あの人たちは、幻燈を映して、講演もいたしますわ。素晴らしい喫茶室もありますし、必要なものは何でもございませう。あの人たちは、私たちに非常に親んでゐます。リーザンカが病氣で臥せつてゐるのを聞きますと、みんなはお祈禱をあげて、讚美歌を合唱しますわ。無教育ですけど、情味はもつてをりますわ。」

「この家には、男の人が誰もゐないやうですね？」とコロリヨフは言つた。

「え、一人も。ピョートル・ニカローリッチは一年半前に亡くなりまして、あとは私たち三人だけになりました。私たちは、夏はこゝで暮らして、冬はモスクワのポリアンカで過ごします。私は——家族の一人として——もう十一年もあの人たちと一緒に暮らしてをりますの。」

晚餐の料理は、小蝶鮫、雛鶏の包焼、果物の蒸煮などが出た。葡萄酒は佛蘭西産の上等であつた。

「どうぞ、お寛ぎくださいませ。」とクリスチーナ・ドミトリエフナは、食べては拳で唇を拭ひな

がら言つた。彼女は、こゝの生活に非常に満足してゐるらしかつた。「どうぞ、もつと召しあがつて。」

晚餐の後、醫師は、彼の部屋に案内された。そこには、彼のために寢臺の支度が出来てゐたが、彼は少しも眠氣を感じなかつた。室内は息苦しくむつとして、塗料の匂がした。彼は外套を着て、部屋を出た。

戸外の空気は冷えきつてゐて、はやくも曉方の色が仄めいてゐた。丈の高い煙穴や、バラツクヤ、倉庫をもつた五棟の建物の集團は、しつとりとした大氣の中に、その輪廓をくつきりと浮べてゐた。祭日で仕事は休みだったので、たくさん窓は眞暗であつた。が、たゞ一つの建物だけに、熔爐が燃えてゐた。その窓の二つは、眞赤であつた。そして煙のまざつた焰が、しつかり無しに煙穴から吐き出されてゐた。構外の遙か遠くに、蛙がころころ鳴き、夜鶯が歌つてゐた。

労働者たちの眠つてゐる工場の建物やバラツクヤを眺めながら、彼は、いつも工場を見た時に考へたことを、今再び思ひ耽つた。彼らは、労働者たちのために演藝會を催し、幻燈を用意し、工場醫をおき、そして凡ての種類の改革を計つたかも知れない。が、同時に、驛からの途中で出會つた労働者たちは、ずっと以前、彼が少年時代から見たり聞いたりしてゐた彼等と、工場に演藝

會もなく、改革もなかつた彼等と少しの變りも見られなかつた。痼疾の哀訴に對して、正しい判断を下すことに馴れてゐる一醫師として——不可解な、不治の病氣の急變に對して、正しい判断を下すことに馴れてゐる一醫師として、彼は工場といふものを、或る僞瞞の對象として觀察し、今も尙混沌としてゐる、除去されないその原因を觀察し、工場方面の生活に於ける凡ゆる改革を觀察することは、決して無意味の考察ではなく、却つて、不治の病患に對する判断にも比較すべきだと彼は思つた。

「これらの考察が、もちろん、徒勞に終る場合もあるにはちがひない……」と彼は眞赤な窓を眺めながら思つた。「この工場の千五百人、或は二千人の労働者は、不健康な環境の裡に、何らの休養もなく、働きつゞけ、粗悪な更紗を作り、飢餓線上に生活し、僅かの時間をぬすんで、夢遊病者のやうに居酒屋へはいり込んでゐる。その管理者としては、百人ばかりのものが勤めてゐるが、彼等の全生活は、罰金を課したり、怒鳴りつけたり、不正を企てたりすることに費やされてゐる。そして所謂工場主と呼ばれる二三人のものが、自分では全然仕事をせず、粗悪な更紗を自ら嘲笑してゐるに拘らず、その利益を享樂してゐる。が、その利益は、どうなつてゐるのであらうか？ 何んな具合に使用されてゐるのであらうか？ マダム・リヤリコフとその娘は不仕合

はせに暮らしてゐる——見るも憫れな有様に置かれてゐる。その中で、たゞ一人、生活を樂んでゐるのは、鼻眼鏡をかけた、愚かしい、中年女のクリスチーナ・ドミトリエフナだけである。それ故、五棟の建物の集團が活動してゐるのも、粗悪な更紗が東洋市場へ賣られるのも、單に、クリスチーナ・ドミトリエフナが小蝶鮫を食べ、マデイラ酒を飲むためだと言つてもいゝ位である。突然、奇妙な音響が聞えた。コロリコフは、さつき晚餐の時にも、同じやうな音を耳にした。それは誰か、建物の一つの傍で金屬板を叩いてゐるのであつた。彼は音板を打ち、直ぐそのあとで、その響が、短かく、途切れがちに、調子はづれに、『デイル……デイル……デイル』といふやうにも聞えるほど、餘韻を停めるのであつた。そして三十秒ぐらゐ靜かになつてゐたが、やがて他の建物から、同じやうに調子はづれな、不快な、鈍い音響が聞えて來た。「ドリン……ドリン……ドリン……」と十一度。紛れもなく、それは夜番が『時の知らせ』を打つたのであつた。三ばん目の建物の傍では、『チュツク……チュツク……チュツク』といふ音がした。すると、凡ての建物の傍から同じやうな音響がはじまつて、やがてバラツクの後方でも、門の向うでも鳴り響いた。夜の靜寂を破るその響は、さながら、赤い眼をもつた巨人——工場主と同時に労働者を支配して、兩者を欺いてゐる悪魔——その者の叫び聲であるかのやうにも思はれた。

コロリヨフは外面の平野へと構内を出た。

「誰だ、そこへ行くのは？」と門のところ、誰か、ぶつきら棒な聲で訊いた。「まるで監獄のやうだな」と醫師は思ひながら、何とも答へなかつた。

外へ出ると、夜ナイトと蛙フガの聲は、一さう鮮さやかに聞えて、五月の夜の魅惑は深かつた。驛の方から汽車の轟きが聞え、どこか遠くの方では、眠たげな雄鶏が時をつくつてゐた。が、同じやうに夜の静寂に浸つて、世界はしんしんと假まご睡んでゐた。工場からいくらかも離れてゐない野原には、一つの家の骨組と建築材料の堆積とが見えてゐた。コロリヨフは板の上に腰をおろして考へつゝけた。

「この工場で幸福を感じてゐるのは、あの家庭婦一人だけである。そして工場では、彼女を満足させるために、みんなが働いてゐる。が、それも皮相の外見に過ぎないのだ。彼女はたゞ飾物でしかないのだ。これらの凡てを領有してゐる眞の人物は、悪魔なのだ！」

そして彼は、彼の信じてゐない悪魔について考へながら、焰に輝いてゐる二つの窓を振りかへつて見た。悪魔は、その眞赤な眼で彼を睨んでゐるかのやうに思はれた——強者と弱者との聯繫を創りあげた、未知の力である悪魔、人間の微力をもつては矯正し難い、嫌悪すべき混沌を創り

あげた悪魔——それが主人公なのだ。強者は生活のために弱者をしひたげてゐる——それは自然の法則である。が、それは新聞の論説か、学校の教科書でのみ、賢明に説かれもし、容易に判断もされる問題である。人間相互關係の交錯した混亂の裡にある、その日その日の生活の争闘に於ては、もはや、それは法則ではないのである。それどころか、強者も弱者も、彼等の相互關係に於ては等しく犠牲であり、人間は愚か、生活の外側に立つて、不本意にも、未知の誘惑的な力に屈服する時には、その論理も笑ふべき迷妄に陥るのである。

板に坐つて、こんな考へを追つてゐるコロリヨフは、いつか段々と、この未知の神秘的な力が、現實に彼に迫つて来て、彼を奪ひ去つてゆくやうな氣持ちに捉はれてしまつた。しばらくする中に、東の空は刻々に青白くなつて、時間は素迅く經つていつた。あたりには人影一つ見えず、あらゆるものが死滅したかのやうに静かであつたが、五つの建物とその煙穴とは、曉方の灰色を背景にして——晝間見るとは趣の異つた——或る特殊の光景を描き出してゐた。その或るものは、内部に蒸氣機關や、動力や、電氣や、電話のあることを忘れさせて、無意識な象徴をもつた石器時代の素朴な湖上の家を思ひ起さした……

そして又もや、そこから「デイール……デイール……デイール」の音響が十二度聞えた。ちよ

つとの間の静けさ——三十秒ばかり途絶えてから、構内の、もう一方の建物から鳴り出した。
「ドリン……ドリン……ドリン……」

「何といふ不愉快な音だらう、」とコロリヨフは思った。

「ヂュツク……ヂュツク……ヂュツク……」と三ばん目の場所から、突然、悶へるやうな鋭い音響が繰りかへされた。「ヂュツク……ヂュツク……」

それが十二度打つのに四分かゝつた。やがて又、響を押し停めると、再び凡てのものが死滅したやうに静まりかへつた。

コロリヨフは、しばらく坐つてゐた後で、家へ戻つたが、今度は、もつと長い間坐つてゐた。隣りの部屋では囁き聲がして、のろくさと上靴を引きずる音と裸足の足音がしてゐた。

「彼女はまた癡癡けたのかな？」と醫師は思った。

彼は患者の容子を見にいづた。もはや、室内はどこも明るくなつてゐた。朝霧を透して流れてむ仄かな日光は、客間の板敷や壁の上にもちらついてゐた。リーザの部屋の扉は開けてあつた。リーザは化粧着をつけ、肩掛を羽負つて、頭髮を垂れさげたまゝ、寢臺の傍の低い椅子に坐つてゐた。

「気分はどうですか？」とコロリヨフは訊いた。

「有難う、」と彼女は頰額を押さへて見て、それから額へ垂れかゝつてゐる頭髮をかきあげた。

「あなたは眠らなかつたのですね、」と彼は言つた。「そとはいゝ天気です。すつかり春です。夜霧が歌つてゐますよ。あなたは暗黒に坐つて、何か考へごとをしてたんでせう。」

彼女はちつと耳傾けながら、彼の顔を見詰めた。彼女の眼は愁はしげであつた、物思はしげであつた。明かに、彼に何ごとかを話したがつてゐるらしかつた。

「こんなことは、時々起るんですか？」と彼は言つた。彼女は唇をふるはしながら答へた。

「えゝ、よく起りますの。ほとんど毎晩、私は悲しい思ひをしますわ。」

その時、構内まはりの夜番は二時を打ちはじめた。二人は「ダイール……ダイール……」を聞いた。そして彼女はおのゝいた。

「あの響は、あなたを刺戟しますか？」と彼は訊いた。

「刺戟するわけでもありませんけれど、こゝの物は何もかも私を苛まさせますわ、」と彼女は答へて、ちつと思ひに沈んだ。「何もかも私をいらいらさせるんですよ。私はあなたのお聲で、私に同情してくださるのがわかりますわ。私は、あなたにお目にかゝつた瞬間から、あなたになら、

何もかもお話し出来ると思ひましたわ。」

「では、話してお聞かせなさい。」

「私は、いつも考へてゐることを、あなたにお話ししたいんです。私は、病氣ぢやないやうな氣がするんですけど、心氣沮喪して、憎えてゐるんですわ。否應なしに、こんな風にさせられてゐるんですもの。他に何にも原因はありませんわ。非常に健康な人だつて、もし泥棒が窓のあたりをうろついてゐるとしたら、不安にならずにはゐられないでせう。それと同じやうに私はのべつにお醫者の診察をうけさせられてゐるんです。」と彼女は含羞かじかんだやうな微笑みを見せた。「私は、もちろん謙遜して、その處置の恩恵を拒みはしませんわ。けれど、私は、お醫者さんにはなく、私をよく理解して、私が正しいか、間違つてゐるかを説明してくれる、誰か親しいお友達と話し合ひたくてなりませんのよ。」

「あなたには、さういふお友達はないんですか？」とコロリヨフは訊いた。

「私は獨りぼつちなんですの。私にはお母さんがゐますわ。私はお母さんを愛してゐますわ。けれど、やつぱり獨りぼつちなんですの。そのために、こんなことが起るんですわ……獨りぼつちの人間は、物を讀む時間が多いものですわ。その代り、めつたに人と話をしませんし、聞くこと

もありません。さういふ人には、生活は神秘的ですわ。さういふ人たちは神秘主義ですから、時々、ありもしない悪魔の姿を見るんです。レルモントフのタマールは、獨りぼつちで、よく悪魔に會つてゐます。」

「あなたは澤山讀みますか？」

「え、私は朝から晩まで、いつも自由の時間ですもの。私は晝間讀んでゐますわ。夜は、私、頭の中が空虚になつてゐますのよ。いろいろな思ひの代りに、いろいろ幻影を描いてゐますわ。」

「あなたには、夜、何か見えるのですか？」とコロリヨフは訊いた。

「いゝえ、私はただ感じるだけですわ……」

彼女は再び微笑みを見せて、醫師を見上げた。そしていかにも愁はしげな、敏感らしい眼付で彼を見詰めた。彼を信じて、彼と打ち融けて話したがつてゐるやうに、彼の考へと同じことを彼女も考へてゐるやうに、彼には思はれた。が、彼の方から話し出すのを待つてゐるらしく、彼女は口を噤つぶんでしまつた。

彼は、何を彼女に話したらいゝかを感じた。もし彼女が五棟の建物と百萬の財産とを所有したならば、出来るだけ早く、それらを見棄てなければならぬことを——夜、姿を見せたあの悪魔

を追ひやらなければならぬことを、明かに覺つた。と同時に、彼女がそんな風に考へてゐるとは、そして彼女が信頼の出来る對手を求めてゐることは、彼には明かであつた。

が、それをどんな風に話したらいいか、彼にはわからなかつた。どう話し出したらいいか？ 處刑をうける者に、その罪の宣告について話すのは、可哀相なことではないか？ 同様に、富裕な人々に同つて、何のために澤山の金が必要であるか、何故、その財産の中少しばかりしか使はないのか、と訊ねるのは、具合のわるいものだ。財産があるために、不幸であることを自覺してゐる者にさへ、何故、その財産を見棄てないのか、と訊ねるのは、具合のわるいものだ。

「どう話せばいいのか？」とコロリヨフは思案した。

「話していいか、どうか？」

そして彼は、その話の主題を、極めて婉曲に言つた。

「あなたは工場主の地位や、富裕な財産の相続人であることを、幸福とは思つていらつしやらないんでせう。あなたは、それに對するあなたの権利を信頼してはいらつしやらないんでせう。それがあなたの不眠症の原因なんです。もちろん、あなたが満足してをられて、よく熟睡なさるやうなら、その方がいゝにはきまつてゐます。けれども、あなたの不眠症は、むしろ矜るべきです

ね。或る場合、それは良き象徴です。實を言へば、われわれの間で取り交はす斯うした主題は、われわれの両親などには、とても考へられもしないこつてせう。夜になると、彼らは、録に口もきかずに、ぐつすり眠つてしまふのです。われわれ若き世代は、熟睡は愚か、休養の時間もなく、多くの問題を論じ合つて、われわれが正しいかどうか、過つてゐるか否かを判断しようと努めてゐます。われわれの子供たちのために、或は孫たちのために、この問題は——彼等が正しいかどうか、過つてゐるかどうかといふ、この問題は——やがて判断の下される時が来るでせう。彼ら子供たちの時代には、凡ての事が、われわれの時代よりも明瞭になるでせう。今から五十年後には、人生はもつと、もつと良くなるでせう。たゞ、悲むべきは、われわれがその時代まで生き残つてゐないといふことです。もし、われわれが、その時代をちよつとでも覗いて見ることが出来たら、どんなに愉快でせう。」

「その子供たちや孫たちは、どんなことをするとお思ひになりますの？」

「わからないですわね……彼らは一切を抛げ出して、出かけてゆくでせう。」

「何處へ？」

「何處へ？……さう、彼ら自身の欲するところへ！」と醫師は言つて、笑ひ出した。「優れた、聰

明な人間のゆくべき場所は、何處にでもあります。」

彼は懐中時計をちらりと見た。

「ところで、すっかり夜が明きました、」と彼は言った。「あなたの眠る時間です。服をぬいで、ぐつすりとお休みなさい。お知己ちかひになつたことを感謝します、」と彼はつゞけながら、彼女に握手した。「優れた、聰明なお嬢さん、では、左様なら！」彼は當てがはれた部屋へ戻つて、寢床ベッドへはいつた。

朝、馬車の支度が出来た時、みんなは階段へ彼を見送りに出た。疲れきつて、蒼ざめてゐたり、夕イダは、祭日でもあるかのやうに、白い服をまとい、頭髪に花を飾つてゐた。彼女は昨夜と同じやうに、愁はしげに、また考へ深さうに、ちつと彼を見詰めた。微笑みを浮べて、物を言った。そして彼に——たゞ一人彼に——何か特別な、重大なことを語りたいと言はぬばかりの表情を見せて、ちつと彼を見詰めてゐた。彼らは雲雀の聲や教會の鐘かねの音を聞くことが出来た。工場の建物のたくさんの窓は、きらきらと明るく輝いてゐた。やがて馬車が、その構内を横切つて、驛の方へと街道を走つてゆくと、コロリコロリは、もはや労働者のことも、湖上の家のことも、悪魔のことも考へなかつた。が、來たるべき時代について——人生が日曜の朝のやうに輝かしく楽し

くなるであらう時代について——思ひ耽つてゐた。そして、さういふ春の朝早く、三頭曳の輕快な馬車を驅つて、太陽の光を浴びて行つたら、どんなに楽しいであらうかを思ひふけてゐた。

手エーホフ田園小説集



落丁亂丁は發行所でお取
替へ致します。

會員號番 A 219182

昭和二十一年九月五日即
昭和二十一年九月十日發行

定價 貳拾貳圓

譯者 秋庭俊彦
發行者 米山謙治

印刷所 祖谷印刷所
神奈川県湯河原町門川二七一
東京都荒川区下町一ノ一八

配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

發行所 創藝社

本社 神奈川県湯河原町門川二七一
支社 東京都神田區淡路町一ノ二ノ二
電話 東京一九〇四八二

脇田製本

六 號

室 外四編

チエーホフ・秋庭俊彦譯 豫定價金貳拾圓 B6三〇〇頁
十二月刊

★……數多いチエーホフの作品のなから特に五編を選びました。いづれもチエーホフ作品中の傑作であり、珠玉の如き名品としてアルツイパーセフに深い感銘を與へた「許嫁」、奇怪な幻想に依つてレーニンを恐怖に包んだ「六號室」、の問題作を収めました。

六號室 燈火 許嫁 隣人 谷間

ゲーテ・生活と作品

舟木重信著 豫定價金貳拾圓 B6三二〇頁
十一月刊 行豫定

★……文學の世界の中で、作品と人間とのあれほど完全な融合の例はほかにはない。そこからも亦、ゲーテの教訓があんなに切實なものになつてくる。……ジード

沼地の兵士

ラングダホフ著 舟木重信・南三郎譯 豫定價金貳拾圓 B6三二〇頁
十月刊 行豫定

★……ドイツの一青年俳優が何等の理由なくナチスに捕へられ沼地の強制收容所に送られ十三ヶ月の監禁強制労働の生活を強ひられた眞實の記録であります。それは兇器と血と陰謀に依りヒットラーナチスが政權を奪取した當時の政情を描いてゐます。残忍下劣を極めた野蠻なる刑罰や、共産黨、社會民主黨其他の人々との獄中での闘争、等について何等の政治的偏見に執はれることなく赤裸に眞實を描いてゐます。本書がスイスの一書店にて出版されますと十ヶ月のうちに四十八版を重ね、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、オランダ等々の世界各國の反ファシズム國家に翻譯され忽ち數百版を重ねてゐます。面白くて文學的にも非常に優れ、讀後人間性、文化等について深刻に考へさせられるのがこの書物であります。

終

創藝社

¥ 22.00